

福岡市

吉武遺跡群 V

—市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集

1992

福岡市教育委員会

吉武遺跡群 V

福岡市西区大字吉武所在遺跡の調査



遺 跡 略 号 YST-11

遺跡調査番号 8714

1992年3月

福岡市教育委員会

序

福岡市西部の室見川左岸台地一帯には、吉武高木遺跡をはじめ豊かな文化遺産が数多くこされています。

福岡市では、昭和57年の西区の分区に伴って基幹道路の整備が急務となり、西区野方から金武までの道路の新設および改良が進められてきました。室見川左岸台地を南北に継続するその路線内には、埋蔵文化財包蔵地が数箇所含まれることから、事前に記録保存が必要となり発掘調査を行ってきました。その調査成果の一部は埋蔵文化財調査報告書としてまとめられています。

本書は昭和62年度の市道野方・金武線建設に伴う7次調査、吉武遺跡第11次調査をまとめたものです。発掘調査の結果、古墳時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝、近世の溝等を検出しました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまで地元、福岡市土木局、西区役所、飯盛吉武土地改良区の関係者をはじめ多くの方々のご理解とご協力に対し、心から謝意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は福岡市土木局・西区役所による市道野方・金武線建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和61年度から昭和62年度にかけて発掘調査を実施した吉武遺跡群第11次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測には二宮忠司、佐藤一郎、吉武学、山村信榮、大庭友子が、撮影は二宮、佐藤、吉武があたった。
3. 本書に掲載した遺構の実測は石器・石製品を二宮が、他は佐藤、撮影は二宮があたった。
4. 製図は遺構を藤村佳公恵、星子輝美、遺物は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。
6. 本書の編集・執筆は担当の二宮、佐藤の協議のうえ佐藤がこれにあたった。

目 次

序	
I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	2
II 遺跡の位置と環境	3
III 発掘調査の概要	5
IV 遺構と遺物	6
1 検出遺構	6
掘立柱建物	6
豎穴住居跡	10
古墳	13
石組遺構	14
溝	14
2 出土遺物	17
V 小結	30

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	4
第2図 吉武遺跡群第7次調査地域周辺図	折り込み
第3図 掘立柱建物実測図 (1)	7
第4図 掘立柱建物実測図 (2)	8
第5図 掘立柱建物実測図 (3)	9
第6図 掘立柱建物 (4)・柱列実測図	11
第7図 掘立柱建物 (5)・豎穴住居跡実測図	12
第8図 SB20豎穴住居跡実測図	13
第9図 第1号墳周溝・遺物出土状況および土層断面図	15
第10図 SK01石組遺構実測図	16
第11図 溝土層断面図	折り込み
第12図 II区西壁土層断面図	折り込み
第13図 II区東壁土層断面図	折り込み
第14図 1号墳出土遺物実測図 (1)	18
第15図 1号墳出土遺物実測図 (2)	19
第16図 Pit他出土遺物	21
第17図 SD10出土遺物実測図 (1)	23
第18図 SD10出土遺物実測図 (2)	24
第19図 SD10出土遺物実測図 (3)	25
第20図 溝出土遺物実測図 (1)	27
第21図 溝出土遺物実測図 (2)	28
第22図 石器・石製品実測図	29

図版目次

- 図版1 吉武遺跡群第7次調査区周辺航空写真
図版2 1. I区全景(南から)
図版3 1. S B01掘立柱建物(南から)
図版4 1. 1号墳土層(南から)
図版5 1. S D15土層(西から)
図版6 1. S D10溝土層(北東から)
図版7 1. I区北半部(北から)
図版8 1. S B20竪穴住居跡(西から)
図版9 1. I区北端部(南から)
図版10 1. I'区南端部(南から)
図版11 1. I'区北端部(南から)
図版12 1. II区全景(北から)
図版13 1. S K01石組遺構(南から)
図版14 1. S K01細部(東から)
図版15 1. S K01細部(南から)
図版16 1. 同遺物出土状況(南から)
図版17 1. 同遺物出土状況(西から)
図版18 1. S D03土層(西から)
図版19 1. S D06上層(西から)
図版20 1号墳、ピット出土遺物
図版21 S K01・S D10出土遺物(1)
図版22 S D10出土遺物(2)
図版23 S D04出土遺物
図版24 清出土遺物・石器・石製品
2. I区全景(北から)
2. 1号墳全景(南から)
2. 1号墳遺物出土状況(北から)
2. S D10溝(北東から)
2. I区中央部(南から)
2. S B20竪穴住居跡(西から)
2. S B20東側遺物出土状況(南から)
2. I'区南半部(北から)
2. I'区北半部(北から)
2. II区全景(南から)
2. II区全景(北から)
2. S K01石組遺構(南から)
2. S K01石組遺構(東から)
2. S D04遺物出土状況(南から)
2. 同遺物出土状況(北から)
2. 同遺物出土状況(西から)
2. S D04土層(西から)
2. S D05土層(西から)

表目次

- 第1表 野方金武線路線内遺跡発掘調査一覧表
第2表 出土土器一覧表(1)
第3表 出土土器一覧表(2)

付図目次

- 付図1 吉武遺跡群第11次調査I区遺構配置図
付図2 吉武遺跡群第11次調査I'区遺構配置図
付図3 吉武遺跡群第11次調査II区遺構配置図

I はじめに

1 調査に至る経過

福岡市では1982（昭和57）年に、人口の増加に伴って現行の5行政区の内、西区を西区、早良区、城南区に区分した。それと同時に、区内の南北基幹道路の整備が急務となった。福岡市土木局道路計画課では同区野方から金武にいたるまでの道路の新設・改良を計画し、その実施にあたっては土木局道路計画課から教育委員会文化課（昭和60年度より機構改革により埋蔵文化財課）に対して、事業地内の埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会が年次計画に沿ってなされ、それを受けて文化課（埋蔵文化財課）は書類審査、および現地踏査を実施した。路線予定地は埋蔵文化財が数多く包蔵されている室見川左岸台地を縦断するかたちとなり、埋蔵文化財が確認された事業地については双方に加え西区土木農林課が協議をかさね、記録保存のための発掘調査を行うことになった。

第1表に示すとおり、市道野方・金武線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は1983（昭和58）年度の都地遺跡群第3次調査を嚆矢とし、調査では弥生時代中期の斎棺墓群等が検出されており、続く同年度の金武城田遺跡第1次調査では古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物・竪穴住居跡・製鉄遺構が検出されている。1984（昭和59）年度から1985（昭和60）年度にかけては吉武遺跡群第4次調査が同年度の圃場整備事業に伴う発掘調査に引き続いて行われ、弥生時代中期を中心とする時期の斎棺墓群が、1985（昭和60）年度は羽根戸原C遺跡群第4次調査が行われ、弥生時代中期を中心とする時期の集落が検出されている。1986（昭和61）年度は都地遺跡群第4次・七反田遺跡第1次調査が行われ、古墳時代の集落等が検出されている。

1986（昭和61）年度から1987（昭和62）年度にかけては太田遺跡第3次調査、本報告で述べる吉武遺跡群第11次調査が行われ、古代の集落、近世の溝等が検出されている。

事業次数	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	所在地	報告書
1	都地遺跡群第3次	1,630	830601～830731	大字金武字都地	186集
	金武城田遺跡第1次	1,862	831221～840329	大字金武字城田	186集
2	吉武遺跡群第4次	2,300	850326～850531	大字吉武字三十六	187集
3	羽根戸原C遺跡群第4次	1,562	850128～860407	大字羽根戸	188集
4	都地遺跡群第4次	2,560	860514～860730	大字吉武字衣屋田	223集
5	七反田遺跡第1次	2,145	861225～870315	大字吉武字七反田	223集
6	太田遺跡第3次	3,200	870201～870425	大字飯盛	304集
7	吉武遺跡群第11次	3,780	870301～870909	大字吉武	303集

第1表 野方・金武線路線内遺跡発掘調査一覧表

2 調査の組織

調査委託 福岡市土木局道路計画課・西区土木農林課

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任、現福岡市埋蔵文化財センター所長）

埋蔵文化財課長 折尾 学

第1係長 折尾 学（前任） 第1係長 飛高憲雄

庶務担当 岸田 隆（当時）中山昭則

事前審査担当

小林義彦

調査担当 二宮忠司（現福岡市埋蔵文化財センター）・佐藤一郎

調査・整理補助

山村信榮（現太宰府市教育委員会）・藤村佳公恵・大庭友子

発掘作業・資料協力者 井口菊太郎・牛尾豊・太田孝房・尾崎達也・鬼丸邦宏・柳太郎・柳光雄・柴田大正・平田勇夫・広田義美・結城弥澄・脇坂武美・相川和子・飯田千恵子・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾シキヨ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・大内文恵・太田頼子・大穂朝子・大穂栄子・尾崎八重・金子ヨシ子・川口シゲノ・菊池栄子・舩スミ子・清水文代・下河純子・白水智子・正崎由須子・惣慶トミ子・多田咲子・田中ヤス子・典略初・中牟田サカエ・鍋山千鶴子・西島タミエ・西島初子・西島マツ子・西島洋子・西納テル子・西納トシエ・能美八重子・浜田澄美枝・林嘉子・原ハナエ・原征子・平田千鶴子・平田政子・平田ミサ子・平野ミサオ・藤タケ・藤崎洋子・藤野邦子・細川ミサヲ・星子輝美・堀尾久美子・真名子ユキエ・真鍋チエ子・森山早苗・八尋君代・山下アヤ子・山田トキエ・山西人美・結城君江・結城シズ・結城千賀子・結城信子・横田松乃・古岡員代・吉岡タヤ子・吉岡スエ子・古岡トク・吉岡蓮枝・米島ハツネ・脇坂ミサオ・脇坂レイコ・脇山喜代子

その他、発掘調査に至るまでの水道の確保等の諸々の条件整備、排土の仮置き場の確保等について貢献・吉武土地改良区の方々のご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進み無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II 遺跡の位置と環境

先に述べたとおり、吉武遺跡群が位置する室見川左岸台地は遺跡の宝庫と言えるほどに、埋蔵文化財が数多く包蔵されている。脊振山地から北に派生した西山（標高430m）・飯盛山（同382m）・叶岳（同341m）・高祖山（同425m）山地と、同じく脊振山地から北に派生した油山（同585m）山地の間に脊振山地に源を発する室見川が博多湾へ北流し早良平野が形成されているが、これらの山地から山麓部、平野へと移行する部位に台地が分布する。吉武遺跡群は室見川の左岸域の、飯盛山東麓の扇状地が台地化した羽根戸台地上に位置する。

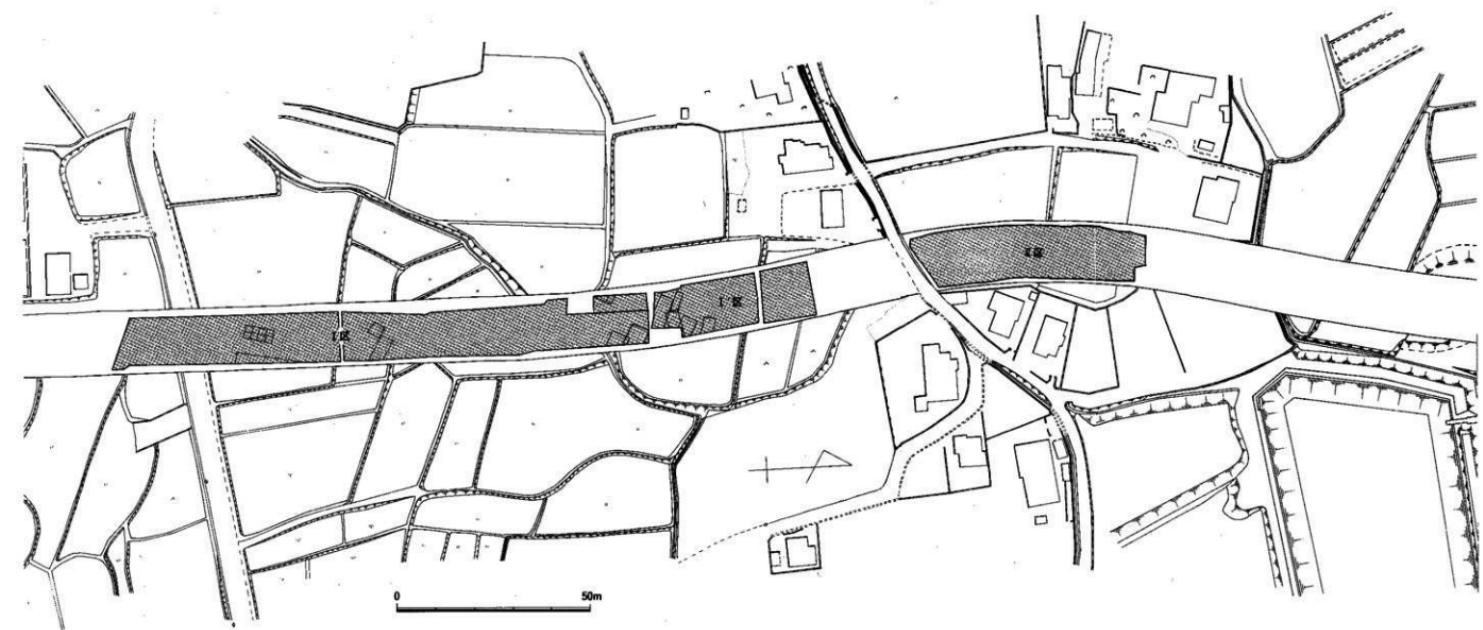
室見川左岸の台地上に立地する遺跡群を概観していくと、飯盛山と叶岳の東北麓の台地上に位置する野方遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落・墳墓群が検出されており、その内弥生時代後期の環濠集落・墳墓群21,166m²は国指定史跡に指定され、1991（平成3）年4月には覆屋が開館し、現在もなお環境整備が進められている。飯盛山東麓の台地上に位置する羽根戸遺跡では旧石器時代の遺物包含層、弥生時代の集落・斐棺墓群・古墳時代から平安時代にかけての集落が検出されている。同じく飯盛山東麓の台地上に位置する吉武遺跡群は旧石器時代から近世にいたる広大な複合遺跡である。旧石器時代の遺物包含層・縄文時代後期の貯蔵穴群が検出されたほか、弥生時代では吉武高木・大石地区での前期末から中期初頭の斐棺墓・木棺墓から構成される墳墓群が確認され、多種細文鏡・数多くの青銅製武器・玉類が出土している。中期後半から末になると斐棺墓が1000基以上検出されている。その内吉武桶渡地区では、墳丘墓が検出され、重圓文星雲鏡・鉄製武器等が出土している。古墳時代では、堅穴住居跡・掘立柱建物から構成される集落から、数多くの陶質土器・初期須恵器が出土している。奈良時代から平安時代にかけては、溝で区画された掘立柱建物が検出され、越州窯青磁・円面鏡・八稜鏡・多量の瓦等が出土している。飯盛山東南麓の台地上には、先に述べた七反田遺跡・都地遺跡群・金武城田遺跡が位置する。

西山・飯盛山・叶岳の山裾部には、古墳時代後期の群集墳が多数築造されている。広石古墳群・野方古墳群・羽根戸古墳群・羽根戸南古墳群・金武古墳群がその主たるものである。鉄滓の供獻する例が広く見受けられることから、墓制と生業、同時期の室見川左岸台地上の集落との有機的関連等解明すべき課題は多々山積されている。

註1 以下、福岡市都市整備局土地計画部土地対策課『福岡市土地分類細部調査報告書』1989による。



第1図 周辺の遺跡



第2図 吉武遺跡第11次調査地域周辺図

III 発掘調査の概要

調査対象は路線内の南は1984（昭和59）年度から1985（昭和60）年度にかけて行われた吉武遺跡群第4次調査区以北から、北は日向川によって開拓された台地の際までの幅16m×延長270mの4,320m²でその内の発掘調査面積は3,780m²である。路線内の日向川をはさんで北側は太田遺跡第3次調査区にある。長大な調査区であるため現道によって2分割され、南側の調査区をI区、北側をII区と呼称する。

調査はI区から着手することにした。発掘調査は1987（昭和62）年3月1日から七反田遺跡第1次調査と並行して行い、七反田遺跡の調査が終了する3月15日から調査は本格化した。なお、I区のほぼ中央には（昭和60）年度に行われた圃場整備事業に伴う吉武遺跡群第5次調査の水路部分の調査区がかかっており、墳丘が削平され石室の腰石以下、周溝のみが残存する古墳一基の内、石室および北側の周溝は既に調査されていた。今回の報告では残る南側の周溝についての報告に留めておく。I区の現状は水田で、遺構面は南半部では水田床上のすぐ下から確認され、古墳の残存状況が示すとおり後世に多大な削平を受けている。I区中央のやや北寄りの谷部では南西から北東へ流れる流路は6世紀後半には埋没している。谷部より北側では厚さ20cm前後の遺物包含層が部分的に残存していた。遺構は古墳の他に、流路の両岸で掘立柱建物群が検出された。掘立柱建物の多くは流路の埋没と同時期のものとみられる。I区の調査は私道に通じる調査区の北西の一部を残して5月10日に終了した。

II区およびI区の残りの部分の調査は6月1日から行われ、調査区を二分する現道の南に接する部分は全面的に搅乱を受けており調査対象からはずした。II区は周辺域とは様相を異にし、17世紀から18世紀にかけての溝・石組遺構が検出され、弥生時代の遺物はみられるものの中世前は遺構は全くみられなかった。II区およびI区の残りの部分の調査は9月9日に終了した。

IV 遺構と遺物

1 検出遺構

掘立柱建物

SB01（第3図、図版3） 梁間2間、桁行4間の南北棟、縦柱の建物である。梁間の全長3.2m、桁行の全長7.6mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径20~70cm、深さ10~50cm、柱痕跡の径5~30cmを計る。方位はN-12°-Eにとる。

SB02（第3図、図版6） 梁間2間以上、桁行5間の南北棟の建物である。梁間の全長

1.8m以上、桁行の全長9.0mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径50~110cm、深さ25~55cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~25cmを測る。東側は調査区外へ延びる。方位はN-14°-Eにとり、SB01と同じくする。

SB03 (第3図、図版6) 梁間2間以上、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長2.0m以上、桁行の全長5.5mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径40~85cm、深さ15~65cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~30cmを測る。柱穴がSB02と重複し、東側は調査区外へ延びる。方位はN-11°-Eにとり、SB01・02と同じくする。

SB04 (第4図、図版6) 梁間1間、桁行2間以上の東西棟の建物である。梁間の全長1.8m、桁行の全長4.7m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径30~50cm、深さ15~65cm、柱痕跡の径20~30cmを測る。東側は調査区外へ延びる。方位はN-55°-Wにとる。

SB05 (第4図、図版6) 梁間2間、桁行2間以上の東西棟の建物である。梁間の全長4.5m、桁行の全長5.5m以上を測る。柱穴掘り方は不整円形で、径30~100cm、深さ20~55cm、柱痕跡の径15~30cmを測る。東側は調査区外へ延びる。方位はN-21°-Wにとる。

SB06 (第4図、図版6) 梁間2間、桁行2間以上の建物である。梁間の全長4.1m、桁行の全長4.9m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径40~65cm、深さ10~35cm、柱痕跡の径10~20cmを測る。東側は調査区外へ延びる。方位はN-59°-Wにとる。

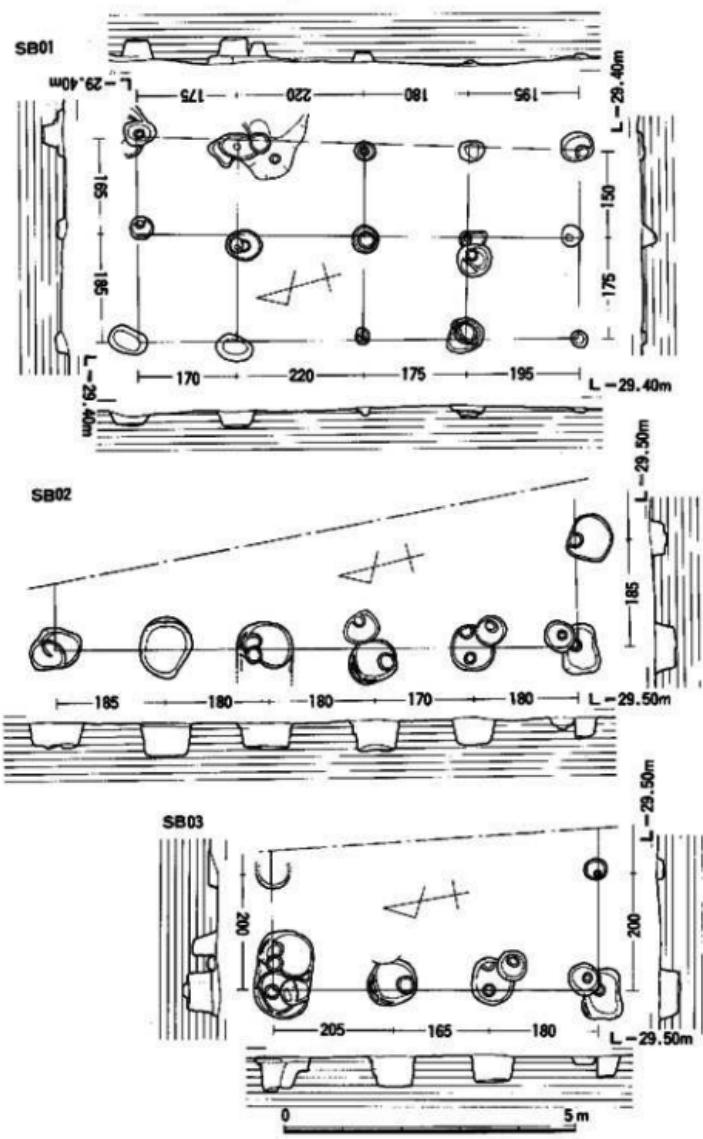
SB07 (第4図、図版6) 梁間2間、桁行3間以上の東西棟の建物である。梁間の全長3.4m、桁行の全長4.6m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径40~90cm、深さ30~60cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~25cmを測る。SD11を切って、東側は調査区外へ延びる。方位はN-60°-Wにとる。

SB08 (第5図、図版6) 梁間2間、桁行2間の建物である。梁間の全長3.1m、桁行の全長3.5mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径55~100cm、深さ20~65cmを測る大型のもので、柱痕跡の径20~25cmを測る。方位はN-38°-Eにとる。

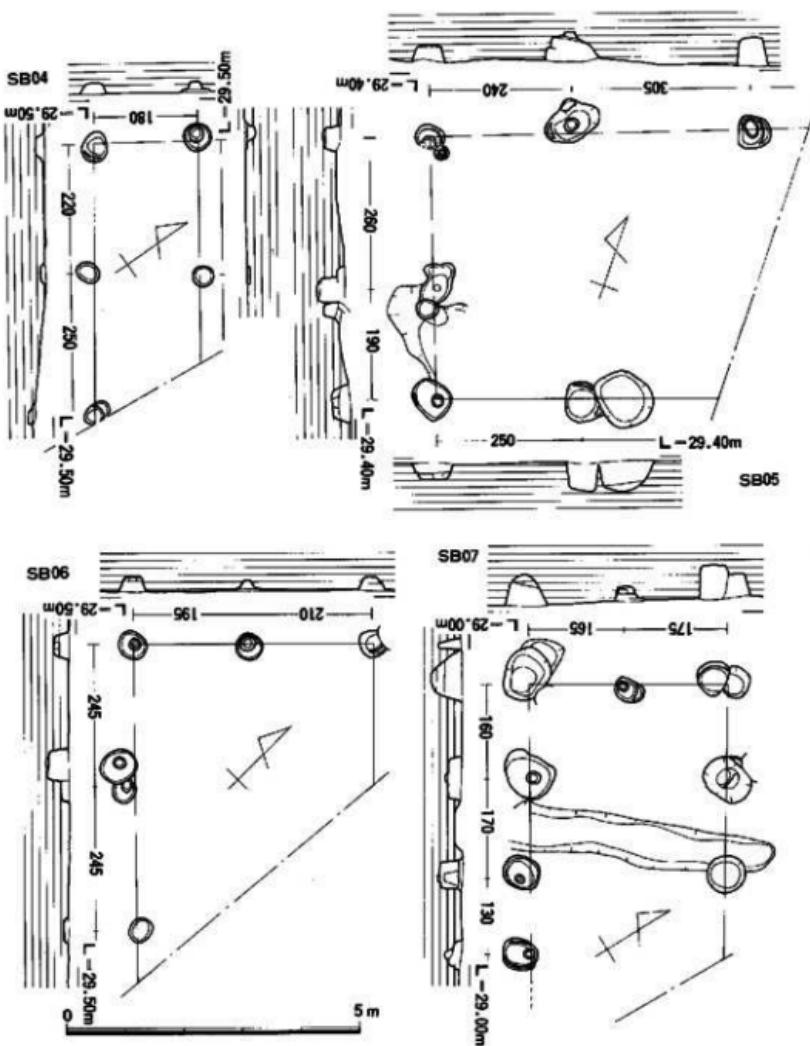
SB09 (第5図、図版6) 梁間2間、桁行2間の建物である。梁間の全長4.1m、桁行の全長4.2mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径30~90cm、深さ10~35cmを測る大型のもので、柱痕跡の径15~20cmを測る。SD11を切る。方位はN-22°-Eにとる。

SB10 (第5図、図版9) 梁間1間、桁行2間の南北棟の建物である。梁間の全長2.1m、桁行の全長4.2以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径50~120cm、深さ10~35cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~25cmを測る。東側へ柱穴が延び、梁間2間、桁行2間以上の東西棟となる可能性がある。方位はN-22°-Eにとる。

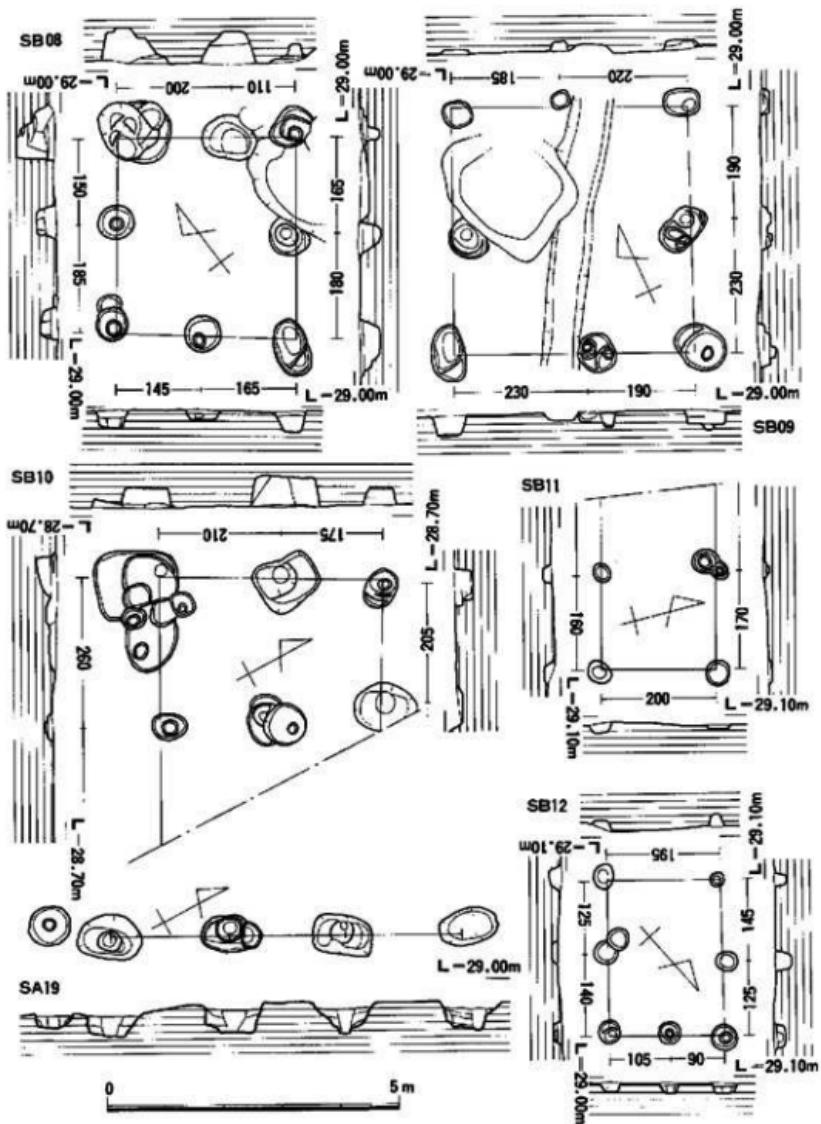
SB11 (第5図、図版6) 1間×1間の建物である。全長は東西1.6m、南北2.0mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径30~45cm、深さ10~25cm、柱痕跡の径10~20cmを測る。東側へ柱穴が延び、梁間1間、桁行2間以上の東西棟となる可能性がある。方位はN-15°-Eにとる。



第3図 摺立柱建物実測図(1)



第4図 捨立柱建物実測図(2)



第5図 摂立柱実測図 (3) · 柱列実測図

SB12 (第5図、図版6) 梁間2間、桁行2間の建物である。一方の妻柱は検出されなかつた。梁間の全長2.0m、桁行の全長2.7m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径20~50cm、深さ10~30cm、柱痕跡の径10~15cmを測る。方位はN-40°-Eにとる。

SB13 (第6図、図版10) 梁間2間、桁行2間以上と考えられる東西棟の建物である。梁間の全長3.3m、桁行の全長2.0m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径60~70cm、深さ10~45cmを測る大型のものである。東側は調査区外へ延びる。方位はN-15°-Eにとる。

SB14 (第6図、図版8) 梁間2間、桁行2間以上の東西棟の建物である。梁間の全長3.5m、桁行の全長2.8m以上を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、径35~110cm、深さ10~50cmを測る大型のものである。西側は調査区外へ延びる。方位はN-20°-Wにとる。

SB15 (第6図、図版8) 梁間2間、桁行4間以上の東西棟の建物である。梁間の全長3.9m、桁行の全長5.5m以上を測る。柱穴掘り方は不整円形で、径40~110cm、深さ10~50cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~20cmを測る。東側は調査区外へ延びる。方位はN-23°-Eにとる。

SB16 (第6図、図版8) 梁間1間、桁行3間の建物である。梁間の全長1.9m、桁行の全長5.6mを測る。柱穴掘り方はほぼ円形もしくは隅九方形で径35~110cm、深さ5~45cmを測る大型のもので、柱痕跡の径15~35cmを測る。西隅の柱穴の一部が調査区外へ延びる。方位はN-19°-Eにとる。

SB17 (第7図、図版10) 梁間1間以上、桁行3間の南北棟の建物である。梁間の全長1.9m以上、桁行の全長4.2mを測る。柱穴掘り方は不整円形で、径55~90cm、深さ40~60cmを測る大型のものである。東側は攪乱を受けている。方位はN-26°-Eにとる。

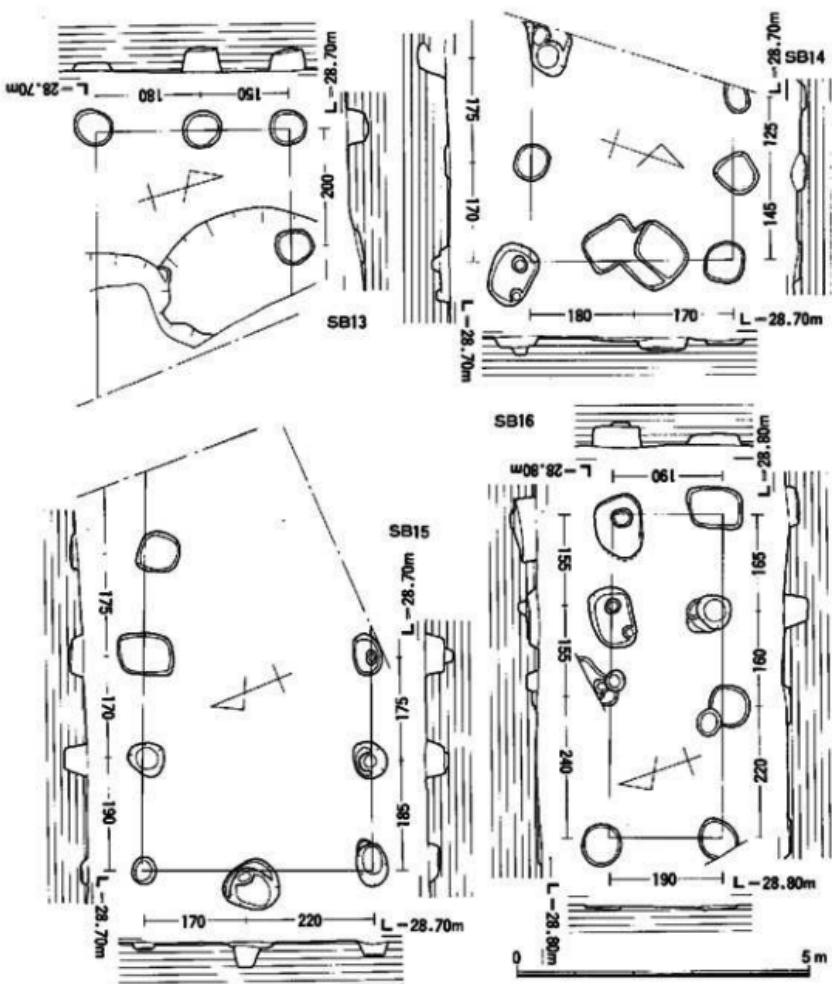
SB18 (第7図、図版10) 梁間2間、桁行2間以上の建物である。全長は東西2.1m以上、南北4.6m以上を測る。柱穴掘り方は小判形で、径55~90cm、深さ40~60cmを測る大型のもので、柱痕跡の径10~20cmを測り、その周囲に挙大の栗石が据えられていた。東側は調査区外へ延びる。方位はN-25°-Eにとる。

柱列

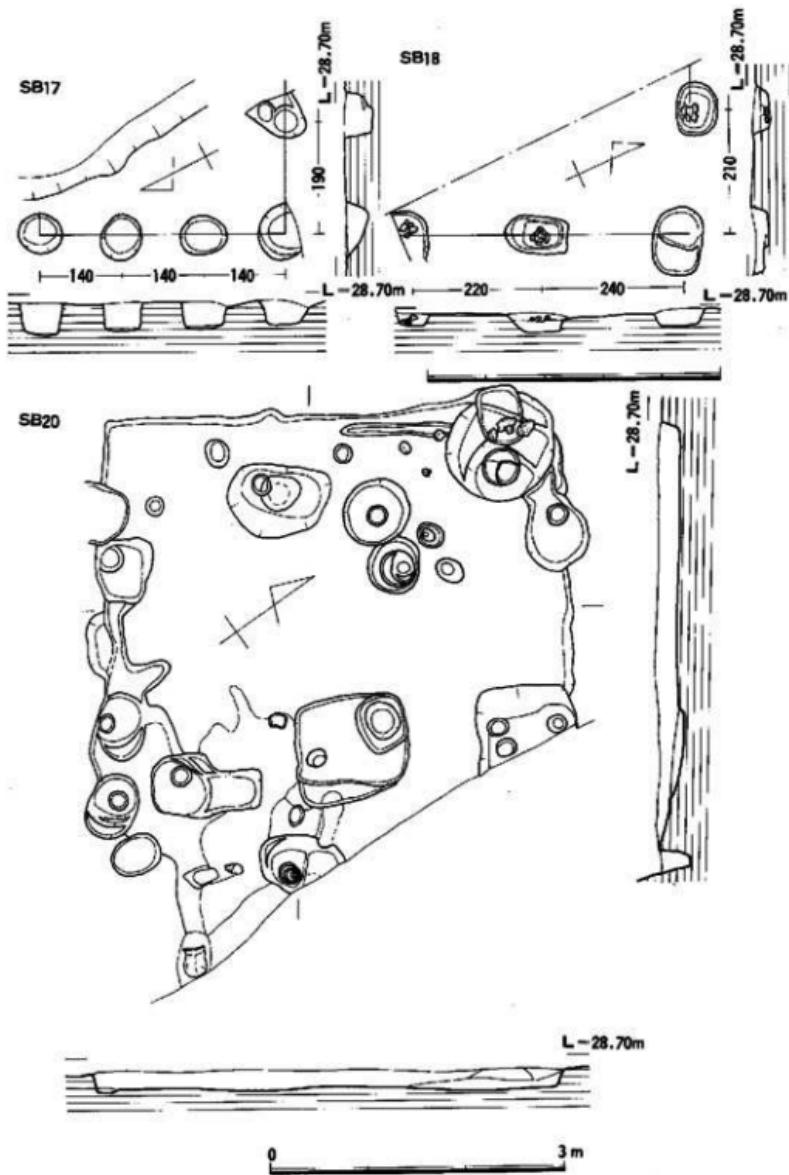
SA19 (第5図、図版9) 4個の柱穴から構成され、北側にさらに延びるものとみられる。延長6.3m検出され、柱間の心々距離は2.1mを測る。柱穴掘り方は小判形で、径60~110cm、深さ20~45cmを測る大型のもので、柱痕跡の径20~40を測る。SB20が埋没した後に掘削された。

竪穴住居跡

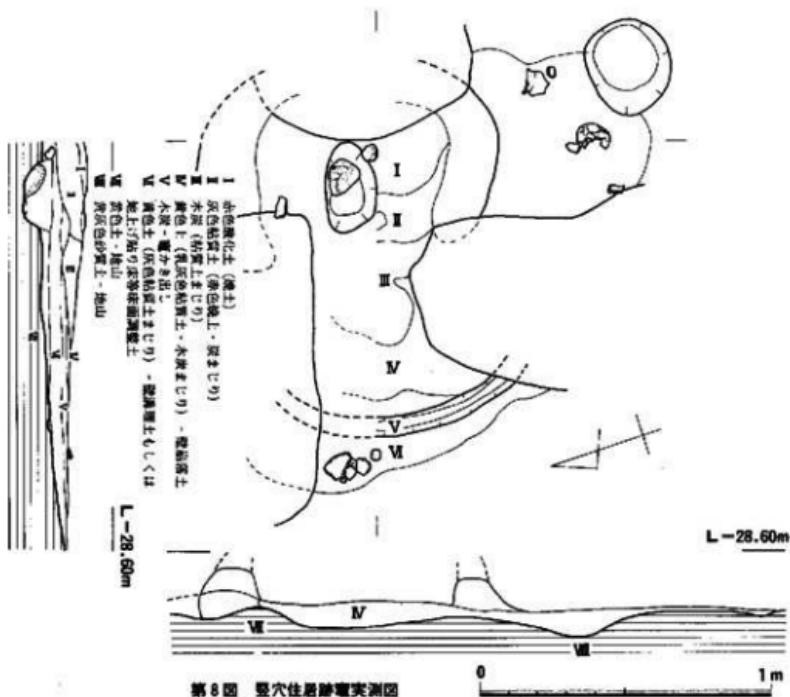
SB20 (第7・8図、図版7・8) 方位をN-20°-Eにとる方形の住居跡である。東西の長さ4.5m、南北の長さ4.8mを測る。後世の削平が著しく、残存する壁の高さは西側壁、北側壁で20cmを測るにとどまる。主柱穴とみられる柱穴は確認されなかった。竪は乳灰色粘質土を用いて東壁の南寄りに築かれ、平面形は柱穴によってその大半が失われているが、コの字状を呈するものであろう。竪の中心は焼土が堆積し、15cm×30cm、深さ10cmの浅いピット状の掘り込



第6図 据立柱建物(4)実測図



第7図 据立柱建物(5)・壁穴住居跡実測図



第8図 穴住居跡実測図

みがあり、支脚に用いられたとみられる拳大の砾が置かれていた。焚き口の前面約80cmの範囲には炭化物、壁崩落土が散在し、その上層約30cm、竈の右側約50cmの範囲には壁崩落土が堆積していた。地山の面の竈の中心から40cmの位置には幅6cmの浅い弧状の溝がめぐらされていた。煙道部は外側へ突出するが、調査区外にかかり削平が著しいことも重なってその形態を復元するには至らなかった。煙道部内の壁崩落土中から土師器甕が出土したが、煙道部の補強材として用いられたものか。

古墳

1号墳(第9図、図版3) III 発掘調査の概要で述べたとおり、I区のはば中央には1985(昭和60)年度に行われた圃場整備事業に伴う吉武遺跡群第5次調査の水路部分の調査区がかかり、墳丘が削平され石室の腰石以下、周溝のみが残存する古墳1基の内、石室および北側の周溝は既に調査されている。ここでは残る南側の周溝についての報告に留めておく。馬蹄形状に巡る周溝で、幅2.6~4.0mを測る。断面形は皿状で、深さ0.9~1.0mを測る。東西の外縁は調査区外にかかるが、周溝の径は約15mに達するとみられる。周溝南西部の底面は近い部位で須恵器甕、土師器甕が出土し、南東部で須恵器瓶が破碎された状態で出土した。

石組遺構

SK01 (第10図、図版1) SD07内に構築され、SD06によって、南西部が切られる。後世に溝の中心が浚えられたためか、溝に沿って帯状に礫群が攪乱を受けた形跡がみられた。溝の外寄りの北辺および東辺は人頭大の礫を用いて直線的に列をなし、その中には石臼の破片がみられた。その裏込めには拳大の礫を用いる。底面は溝の底面とほぼ同一レベルに抑えられている。辺縁の石列の上面は平坦には撒わらず基底部のみが残存したものであろうか。性格については不明である。

流路

SD10 (第11図、図版5・6) 調査区を南西から北東へ流れる自然流路の跡で、6世紀後半にはその大半は埋没している。調査区の東壁面にかかる土層断面図は第11図に示すとおりである。底面に近い黒色粘質土層から遺物・流木等の有機物が多量に出土した。幅5~8m、深さ1.5~1.8mを測り、断面形は逆台形状を呈する。延長約18m検出した。

SD15 (第11図、図版5) SD10の南側約10mで検出した深さ1mの浅いなだらかな落ち込みで、調査区の西壁面付近に鉄滓が集中してみられた他は、遺物はほとんど出土していない。

溝 II区では近世の溝を多数検出した。主要なものについて述べていく。土層断面図は第12・13・14図に示す。

SD01 (付図3、図版11) 調査区を南西から北東に流れる溝で、幅2.5~4.5m、深さ15~30cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。IV層(以下層位は第13図による。)から掘り込まれる。

SD02 (付図3、図版11) 南西から北東へ蛇行して流れる溝で、IV層から掘り込まれる。幅0.7~0.9m、深さ35cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。SD01に切られる。

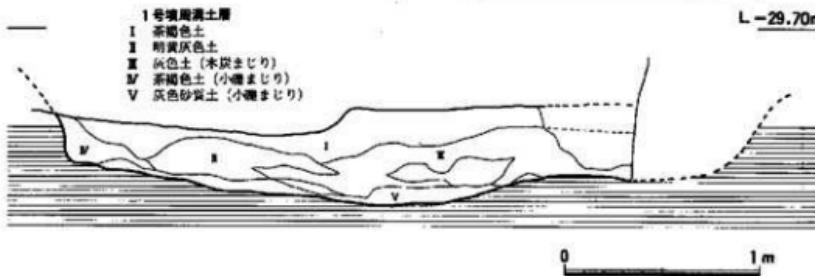
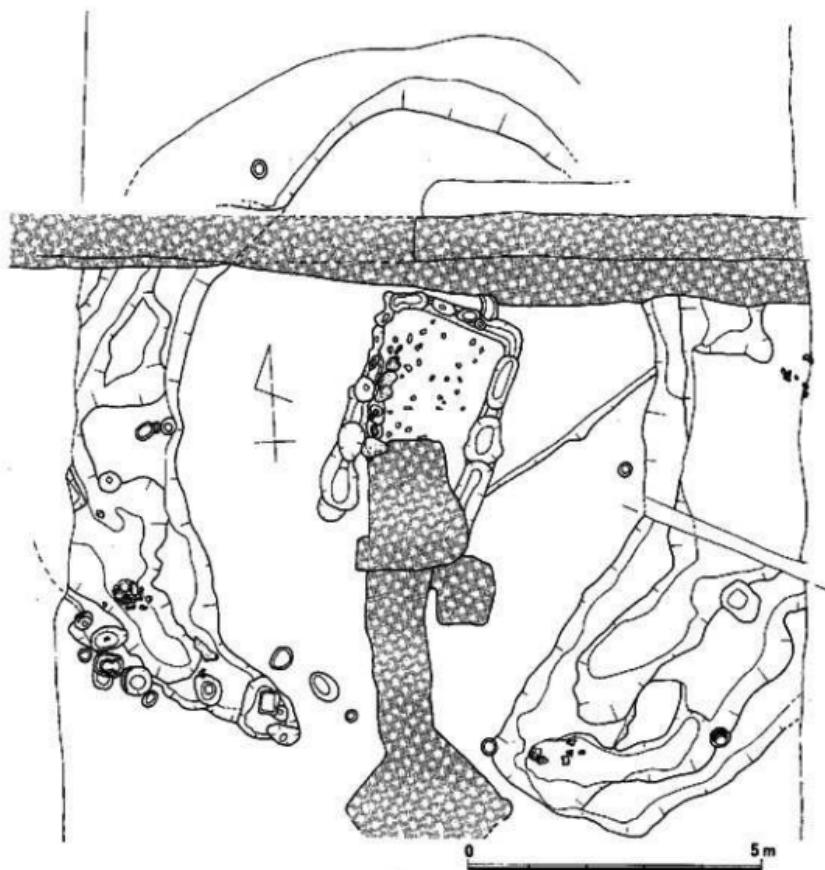
SD03 (付図3、図版18) II層から掘り込まれた幅1.4~1.8m、深さ85cmの東西溝。

SD04 (付図3、図版15~18) III層から掘り込まれた幅1.3~1.8m、深さ30~35cmの東西溝で、人頭大の礫・土器・陶磁器が底面から浮いた状態で出土した。

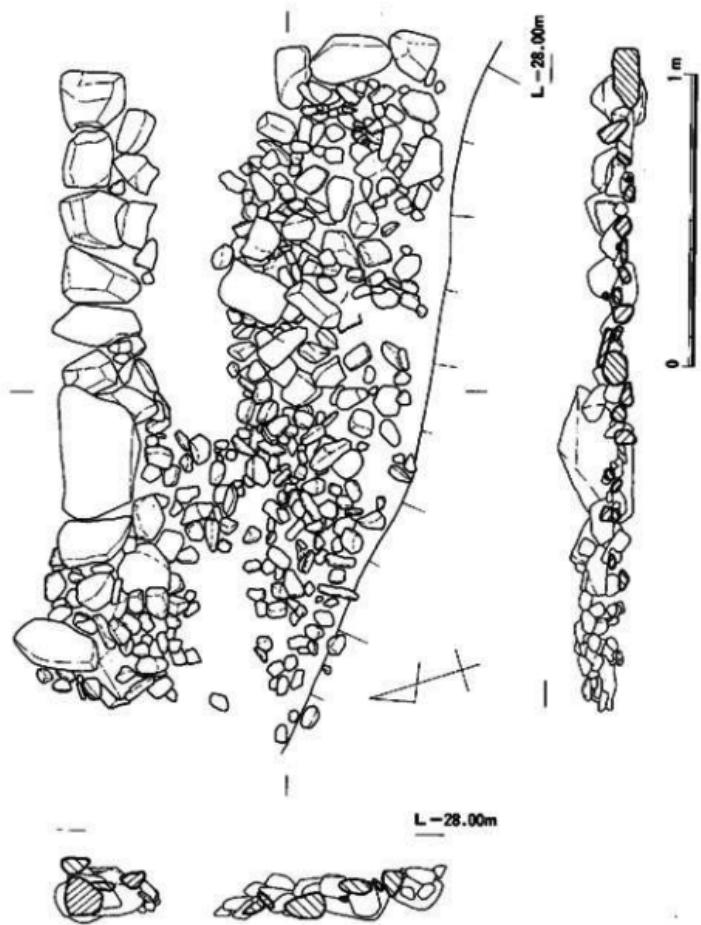
SD05 (付図3、図版19) IV層下から掘り込まれた幅50~70cm、深さ20~45cmの東西溝で、SD06に切られる。

SD06 (付図3、図版19) SD05上面から掘り込まれ(第14図東壁土層)、北西から南東へ走る溝である。幅75~90cm、深さ50cmを測り、SD05・07を切る。

D07 (付図3、図版12) SD05上面から掘り込まれ(第14図)、SD06よりやや東偏して北西から南東へ走る溝である。幅1.9~2.1m、深さ55cmを測る。溝の内側にSK01石組遺構が構築され、SD06に切られる。北側のSD08・09は同様の規模・埋土で、SD07と平行に走る。心々距離は4.5cmを測る。

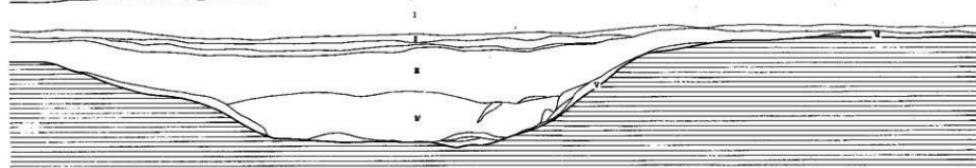


第9図 第1号墳周溝・遺物出土状況および土層断面図



第10図 石組造構実測図

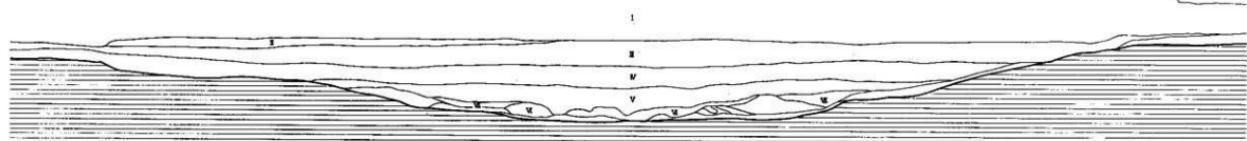
L - 29.50m



S010実験土
I 現代の田面熟成による堆上
II 黄褐色土(田水田底土)
III 深褐色土
IV 黄褐色砂
V 黑褐色粘土(有機質)
VI 黑褐色粘土(有機土層・有機物を含む)

S015実験土
I 黄土(耕作土及び盛土)
II 岩盤褐色粘土(田水田底土)
III 深褐色粘土
IV 黄褐色砂
V 田面粘土土(有機質)
VI 黑褐色砂質土
VII 黑褐色青色砂質土

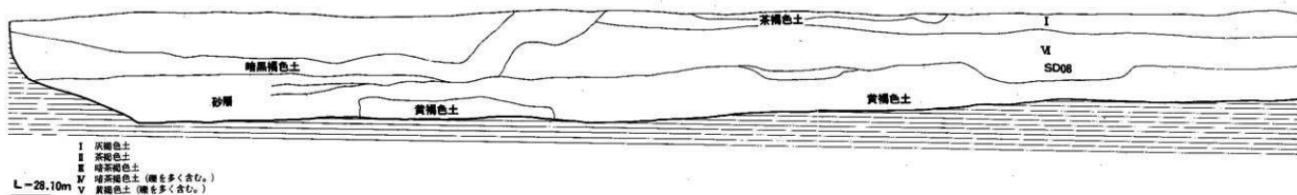
L - 29.50m



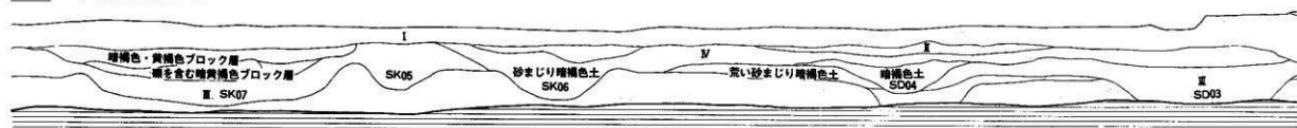
第11図 滅土層断面図

0 5m

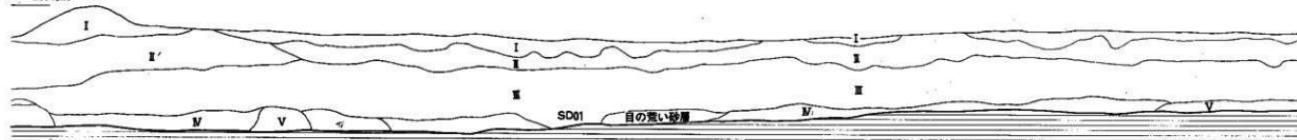
L ~28.10m



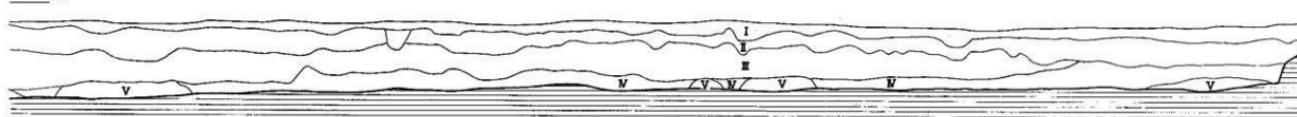
L-28.10m V 黄褐色土 (土を多く含む。)



L-28.40m

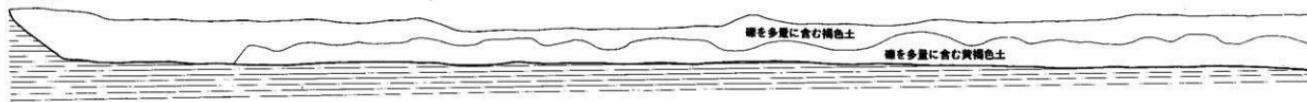


L-28.40m

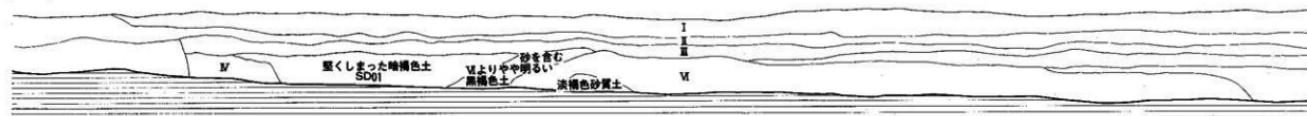


第13図 II区東壁土層断面図

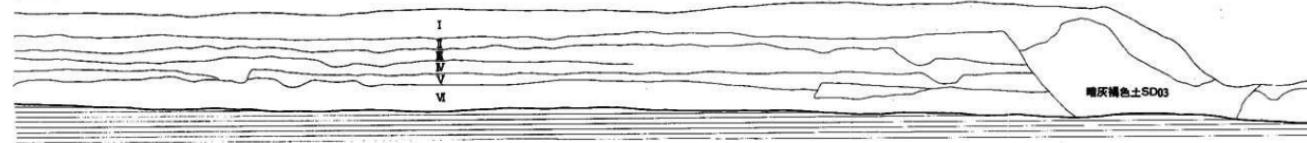
L=28.60m



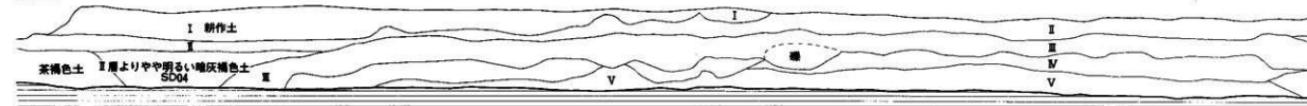
L=28.60m



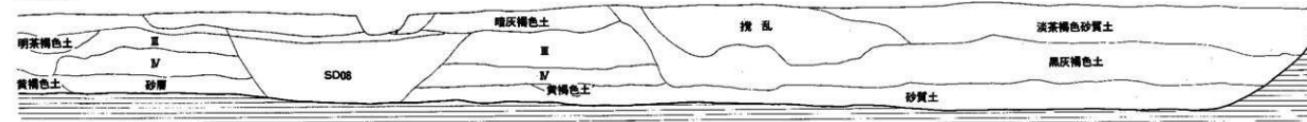
L=28.60m



L=28.10m



L=28.10m



第14図 Ⅱ区 地土層断面図

0 2m

I 緑茶褐色土
II 暗茶褐色土
III 茶系褐色土 (よりやや明るい)
IV 堆灰褐色土 (よりやや明るい)
V 黄褐色土

2 出土遺物

1号墳出土遺物（第14・15図、図版20）周溝南側からの出土である。

須恵器

杯身（1・2） 1は口径11.2cm、器高4.7cmを測る。立ち上がりは高さ18mmを測り、基部から直線的に内傾する。口縁端部内面に沈線状の段がつく。蓋受け部は水平である。底部は回転ヘラ削り、内底部はナデ、その他の部位は回転横ナデを施す。2は口径10.8cm、器高3.1cmを測る。立ち上がりは高さ8mmを測り、基部から短く内傾する。底部は回転ヘラ削り、内底部はナデ、その他の部位には回転横ナデを施す。

高杯蓋（3） 口径15.2cm、器高5.5cmを測る。天井部に丸みをもち、口縁部との境には段がつく。口縁部はわずかに開き、端部内面に段がつく。つまみは中心が若干窪む。天井部外面はカキ目、内面はあて具痕をナデ消し、その他の部位には回転横ナデを施す。

提瓶（4） 把手はなく、口縁部は欠失している。胴部背面は勝らみをもち、器面調整は外側が同心円状のカキ目で、内面はあて具痕をナデ消している。

器台（5） 口縁端部はS字状に外反する。杯部は、突帯によって4段に区切られ、2～4段目間に波状文を施し、下方は沈線と脚部の突帯の間に鋸歯文を刻んでいる。脚部は、突帯によって4段以上に区切られ、その間に台形の透かし孔、透かし孔と同規格の線刻を配する。同列の1～3段目間に線刻を配した場合、4段目が透かし孔1～3段目間に透かし孔を配した場合、4段目は線刻となる。

甕（6） 口縁部は玉線状をなし緩く開く。胴部外面は平行叩きの後、カキ目を部分的に施し、内面は同心状のアテ具痕が残る。

土師器壺（7） 口縁部は丸みをもって「く」の字状に外反し、内面には棱がつき、端部は丸くおさめられている。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。

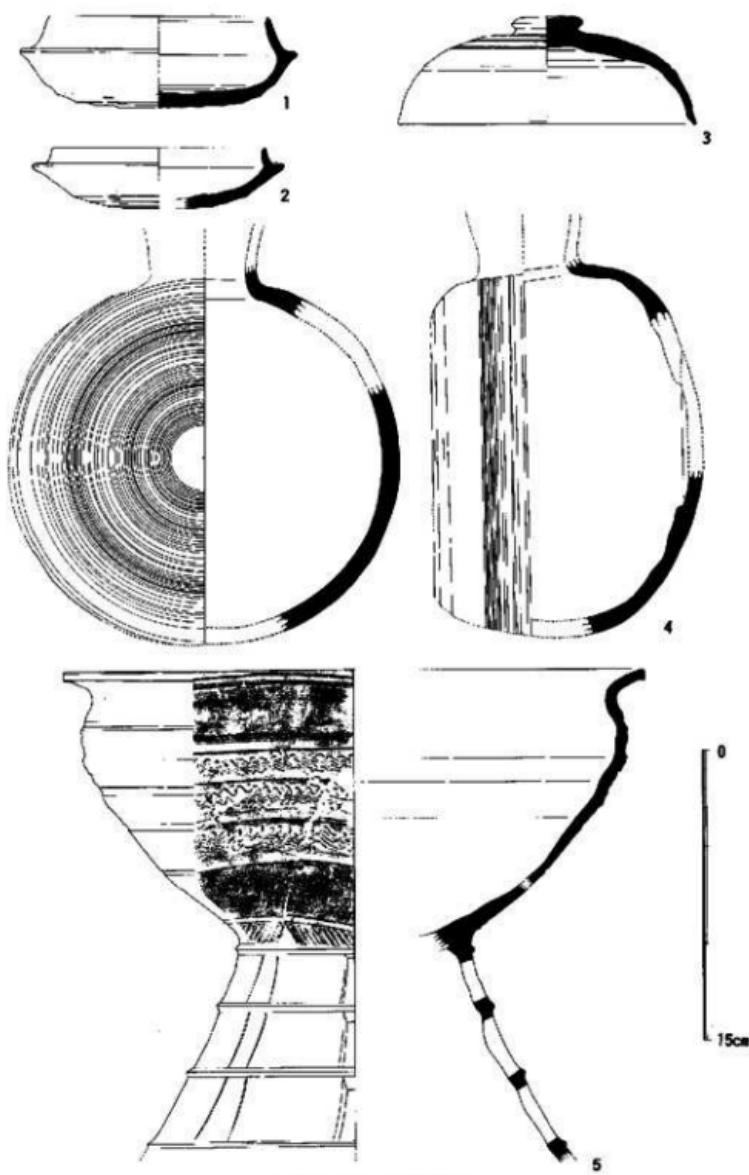
ピット状遺構他出土遺物（第16図、図版20・21）

須恵器杯身（8） 口径11.0cm、器高4.0cmを測る。立ち上がりは高さ8mmを測り、基部から短く内傾する。底部は回転ヘラ削り、内底部はナデ、その他の部位には回転横ナデを施す。
Pit201出土。

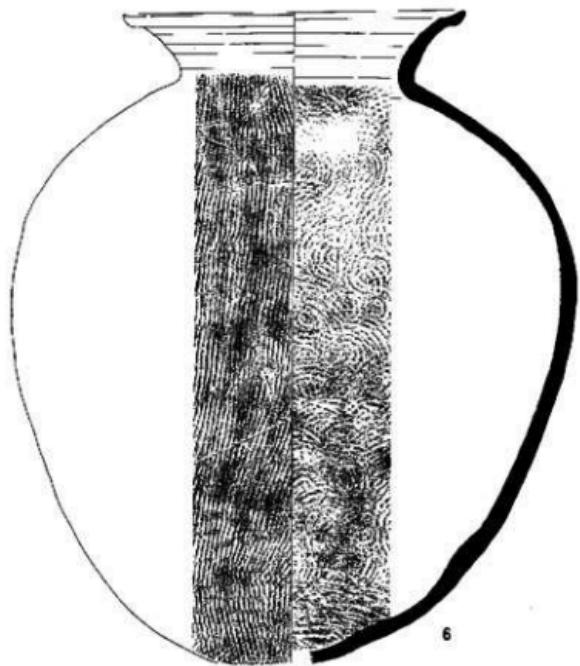
黒色土器椀（9） 口径15.4cm、器高5.0cmを測るA類の無高台の椀である。口縁部は肥厚する体部との境付近から直接的に開く。外面が横ナデ、内面はヘラ磨きが施される。Pit9出土。

土師器杯（10） 底部は静止糸切離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。口径12.0cm、器高2.0cm、底径8.0cmを測る。SX10出土。

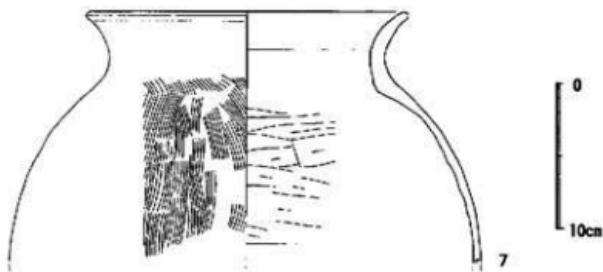
伊万里染付椀（11） 全面施釉の後、疊付の釉をカキ取る。内底見込五弁花のみコンニャク



第14图 I区 填土层断面图



6



7

0
10cm

第15圖 1號墳出土遺物測量圖（2）

判で、口径11.5cm、器高6.0cm、高台径4.9cmを測る。SK01出土。

土師器甕 (12) 口縁部は丸く短く外反し、内面には稜がつき、端部は円くおさめられている。調査は口縁部が横ナデ、胴部は外面が刷毛目、内面はヘラ削りされる。SB20竈外側出土。

溝出土遺物

SD01出土遺物 (第16図、図版20) 遺構の時期は近世であったが時期を示す遺物がいずれも細片であったので、当調査区で同時期の遺構がみられなかった時期の遺物を参考のため取り上げておく。

土師器杯 (13) 口径13.5cm、器高6.6cm、高台径7.7cmを測る。体部中位でやや屈曲するがほぼ直線的に開き、口縁部は少し外反気味である。内底はナデ、その他の部位は回転横ナデを施し、底部はへら切離し、高台は貼り付けによる。

弥生土器壺 (14) 脇部中位に断面「コ」の字状の突帯をめぐらす。脇部の中位は横方向、底付近は縱方向のヘラ磨きを施す。

SD10出土遺物 (第17~19図、図版21・22)

須恵器

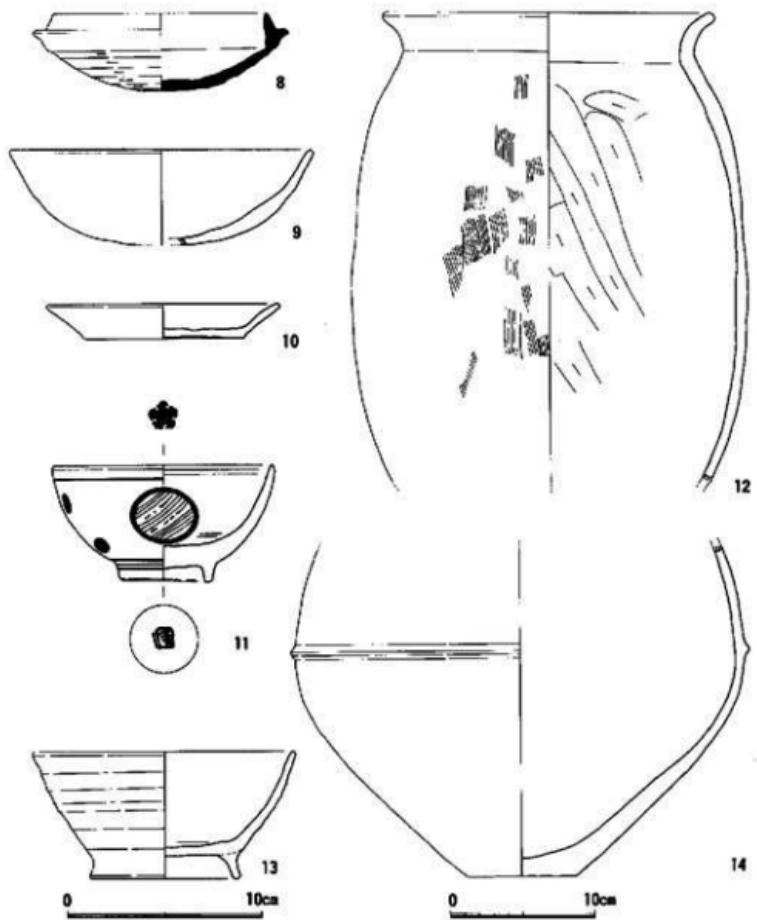
杯蓋 (15~23) 15・16は天井部に丸みをもち、口縁部との境と口縁端部内面に段がつく。15の口縁部はほぼ直立するが丸みをもつ。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位には回転横ナデを施す。16の口縁部は直線的にわずかに開き、口縁端部内面に段がつく。天井部内面まで回転横ナデを施す。17から23の口径は13cm前後で、天井部と口縁部の境に段、沈線はなく、丸くつくられ、口縁端部は丸くおさめられる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位には回転横ナデを施す。

杯身 (24~29) 24~27の立ち上がりは高さ13~19cmを測り、基部からほぼ直線的に内傾する。24の口縁端部内面には沈線状の段がつく。底部は回転ヘラ削り、その他の部位には回転横ナデを施す。28・29の立ち上がりは高さが8mmを測り、基部から短く内傾する。底部は回転ヘラ削り、内底はナデ、その他の部位には回転ナデを施す。

高杯蓋 (30) 天井部に丸みをもち、口縁部との境には段がつく。口縁部は欠失している。端部内面に段がつく。つまみは中心が若干窪む。天井部外面に回転ヘラ削りした後、ほぼ全面に回転横ナデを施す。

高杯身 (31・32) 31は杯部のみの破片資料で、口縁部は直線的に開き、端部内面には段がつく。口縁部と体部の境に段がつく。体部下半は回転ヘラ削り、その他の部位には回転横ナデを施す。32は稜がついた口縁部と体部の境以下の資料で、脚部外面中位に沈線をめぐらし、カキ目を施す。その他の部位には回転横ナデを施す。

甕 (33) 口頭部が欠失する。頭部の付け根は縮まり、体部は球形を呈し、中位に2条の沈線をめぐらせ、上位にカキ目を施す。下半以下はヘラ削り、頭部の付け根から体部内面は回転



第16図 Pit8出土遺物

横ナデを施す。

直口壺 (34) 口縁部が消失し、頸部以下が残存する。肩が張った体部に直立する頸部がつく。肩部に2条の沈線をめぐらせる。調整は底部付近が回転ヘラ削り、その他の部位には回転横ナデを施す。

甕 (35) 口縁端部は若干肥厚し、緩く開く。胴部外面は木目商交平行叩きの後、カキ目を部分的に施し、内面は同心円状のアテ具痕が残る。

土師器

杯 (36~38) 36は技法・調整が須恵器と全く同じである所謂赤焼きの須恵器である。立ち上がりは高さ15mmを測り、基部からほぼ直線的に内傾する。底部は回転ヘラ削り、その他の部位には回転横ナデを施す。胎土には粗い砂粒を含み、明橙色を呈する。37・38の内湾気味に聞く口縁部は若干肥厚し、端部は丸くおさめられている。調整は口縁部が横ナデ後ヘラ磨き、底部は外面がヘラ削り後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きを施す。

甕 (39~42) 39は口縁端部を平坦にし、上下にやや拡張する。口縁部外側から胴部内面まで回転横ナデ、胴部外面にはカキ目を施す。製作の際に回転台を用い、口縁部のつくりは須恵器的である。胎土には砂粒を少量含み、淡黄灰色を呈する。市道野方・金武線建設に伴う七反田遺跡の発掘調査で、SD10と同時期の竪穴式住居跡SB11から同様の甕が出土している。40は口縁部が丸く外反し、端部は丸くおさめられている。胴部最大径は口径とはほぼ同じくする。調整は口縁部が横ナデ、胴部は外側が刷毛目、内面はヘラナデされる。口縁部と胴部の境付近に粘土継ぎ目がみられる。41は口縁部が丸く外反し、内面の径は不明瞭で、端部は丸くおさめられている。口径は胴部最大径より小さい。調整は口縁部の外面が刷毛目の後横ナデ、内面はヘラナデされる。口縁部と胴部の境付近に粘土継ぎ目がみられる。42は口縁部が直立気味に聞く。口縁部内面から胴部外側まで横方向のヘラ磨き、胴部内面にはナデを施す。

砥石 (43) 砂岩製で、3面を研ぎ面として用いている。

SD04出土遺物 (第20図、図版23)

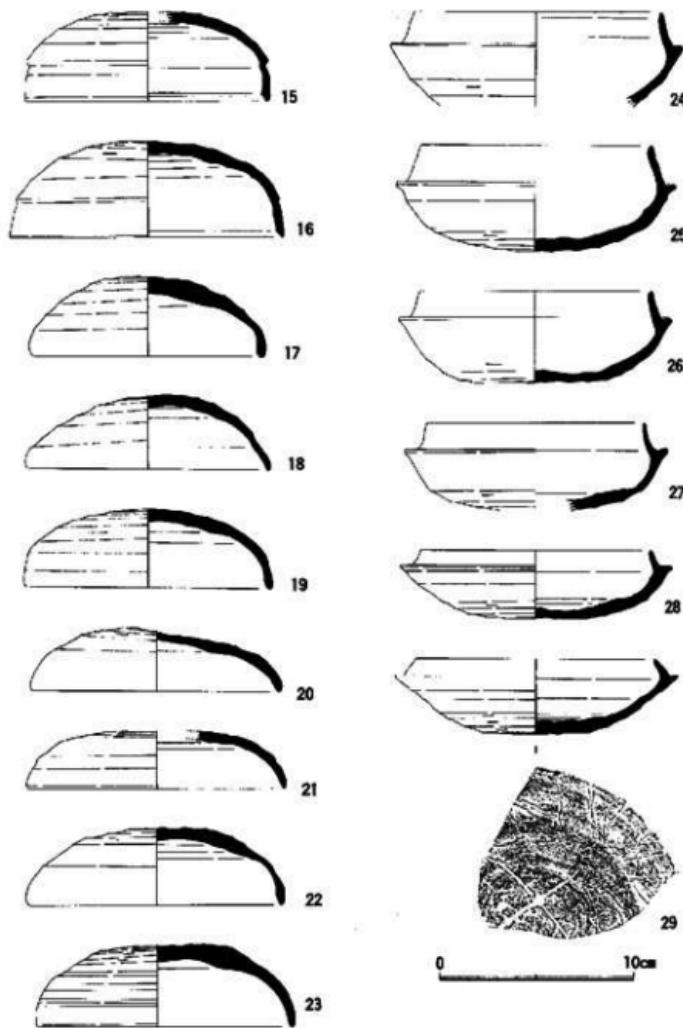
土師器 小皿・杯はいずれも底部は静止糸切離しによる。体部外面から内底外面から内底部まで回転横ナデを施す。

小皿 (44~47) 45・46は底部のみの破片資料で、44~46は底径をほぼ同じくする。47は口径6.5cm、器高2.6cm、底径4.3cmを測る深めの小型品である。

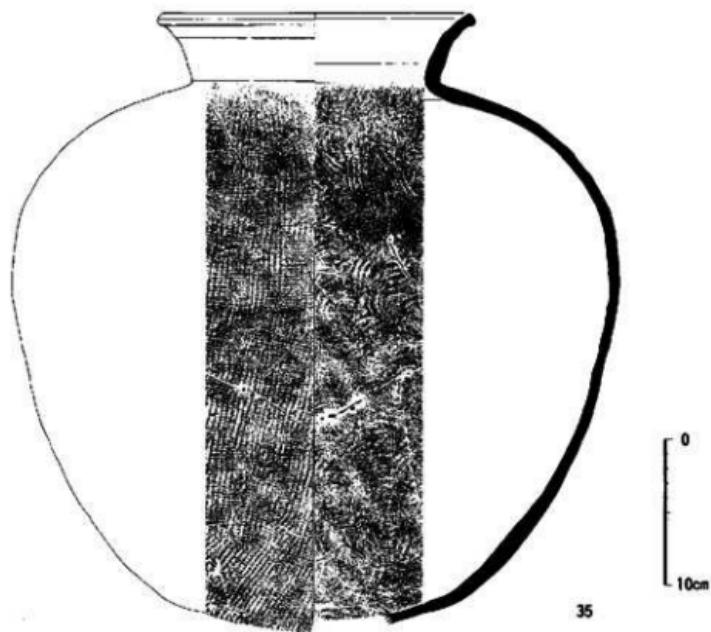
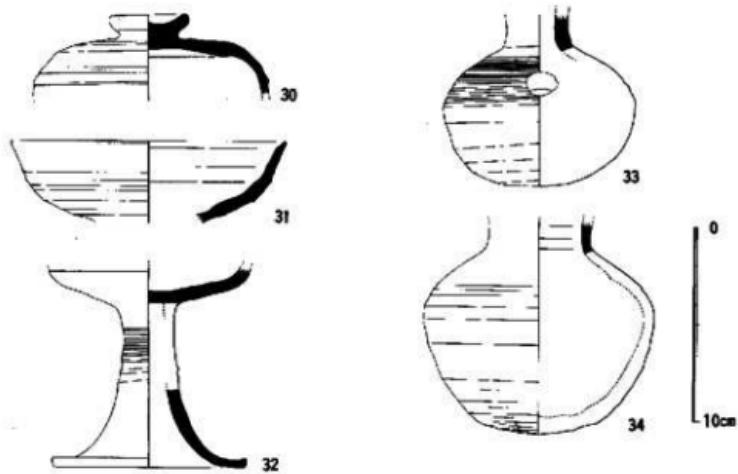
杯 (48~50) 復元口径12.8~15.0cm、器高1.9~2.5cm、復元底径9.0~10.5cmを測る。

すり鉢 (51) 口縁端部を平坦にし、内側にやや拡張する。調整は、口縁端部が横ナデ、体部外面が粗い刷毛目を施し、部分的に指頭圧痕が残る。内面は刷毛目を施した後、4本単位の柔線を入れる。

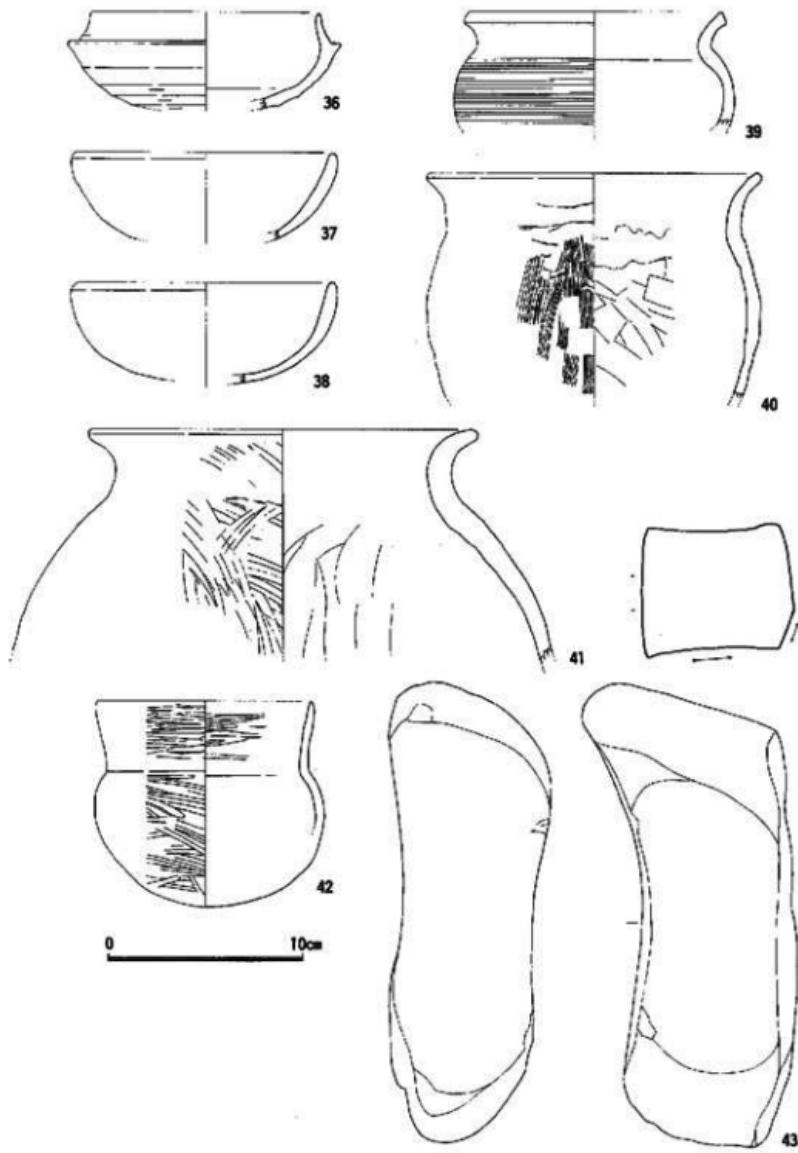
鍋 (51) 口縁端部から外側に張り出す耳がつく。調整は、口縁端部から体部内面にかけて



第17图 SD10出土遗物实测图（1）



第18図 SD10出土遺物実測図（2）



第19図 SD10出土遺物実測図（3）

細かい刷毛目を施し、外面は粗い刷毛目を施す。耳の上面は口縁端部から引き続いて細かい刷毛目、側面から下面にかけてはナデを施す。

陶器

椀 (53・54) 53は粗く削り出された高台付近まで、白色の釉がかかる。胎土には砂粒を少量含み、明赤褐色を呈する。54は直線的に聞く部から、口縁部が直に立ち上がり、端部では外側に屈曲する天日椀である。底部付近まで、茶褐色の釉がかかる。胎土は灰色を呈し、精良である。

茶入 (55) 脇部中位以下の資料で、内面はクロロ目の跡が細かく残をなし、外面は底部付近まで暗緑色の透明釉がかけられる。胎土には白色砂粒を含み、灰黒色を呈する。

SD07出土遺物 (第20図、図版23)

伊万里白磁皿 (56) 見込みを蛇の目釉ハギする。高台は露胎で目アトがつく。

陶器すり鉢 (57) 口縁端部は外側に拡張し、横ナデを施した後、内面に条線を入れる。胎土には粗い砂粒を含み、赤褐色を呈する。

SD02出土遺物 (第21図、図版24)

伊万里染付

椀 (58・59) 58は外面網目文、59は見込み蛇の目ハギの染付椀である。

皿 (60・61) 高台無釉の染付皿である。

陶器鉢 (62) 体部は内清氣味に立ち上がり、口縁端部を玉縁状に肥厚させ、外側に浅い凹線を這らせる。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。

SD03出土遺物 (第21図、図版24)

土師器杯 (63) 底部は静止糸切離しによる。体部外面から内底部まで回転横ナデを施す。復元口径12.0cm、器高2.0cm、復元底径6.8cmを測る。

磨津皿 (64・65) 65は灰釉滑経皿で、砂目積みである。

土師器すり鉢 (66) 体部下半資料で、調整は、体部外面が粗い刷毛目を施し、内面は細かい刷毛目を施した後、4本単位の条線を入れる。内底部にも、巴状に条線を入れる。

石器・石製品 (第22図、図版24)

小型磨製品石剣模倣品 (67) 基部が穿孔され、研磨仕上げかなされている。石材は滑石である。SD11出土。

磨石 (68) 断面は橢円形を呈し、石材は花崗岩である。SD01出土。

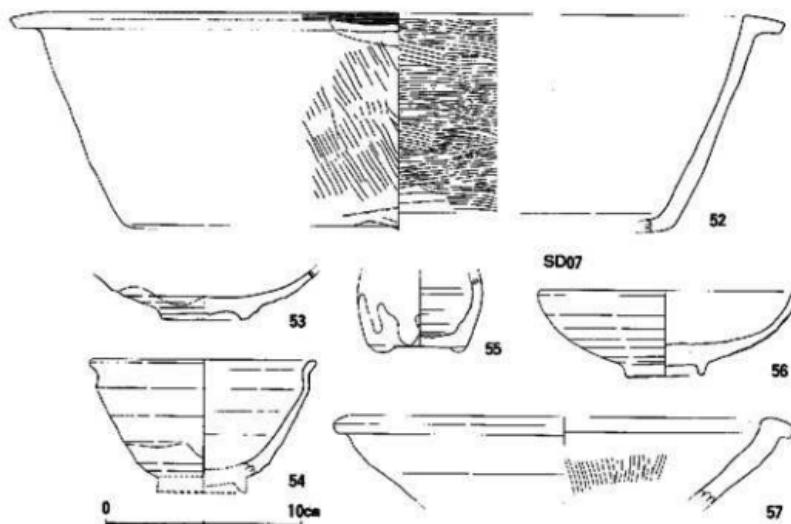
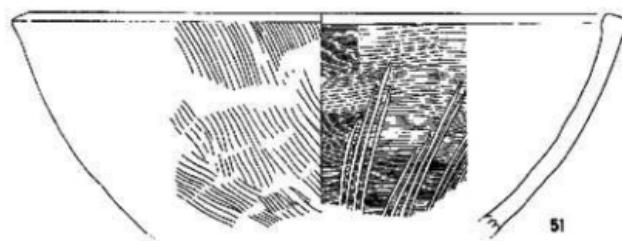
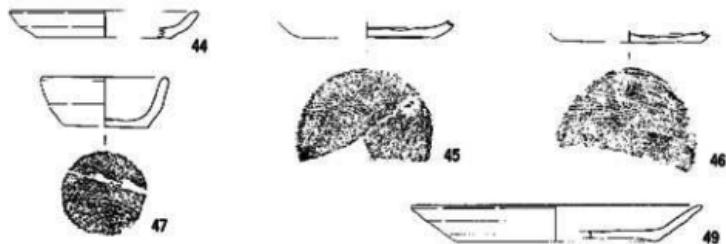
大型蛤刀石斧 (69) 石材は玄武岩で、研磨が施された面が残存する。SD01出土。

砥石 (70) 石材は硬質砂岩で、研ぎ面が一部残存する。SD07出土。

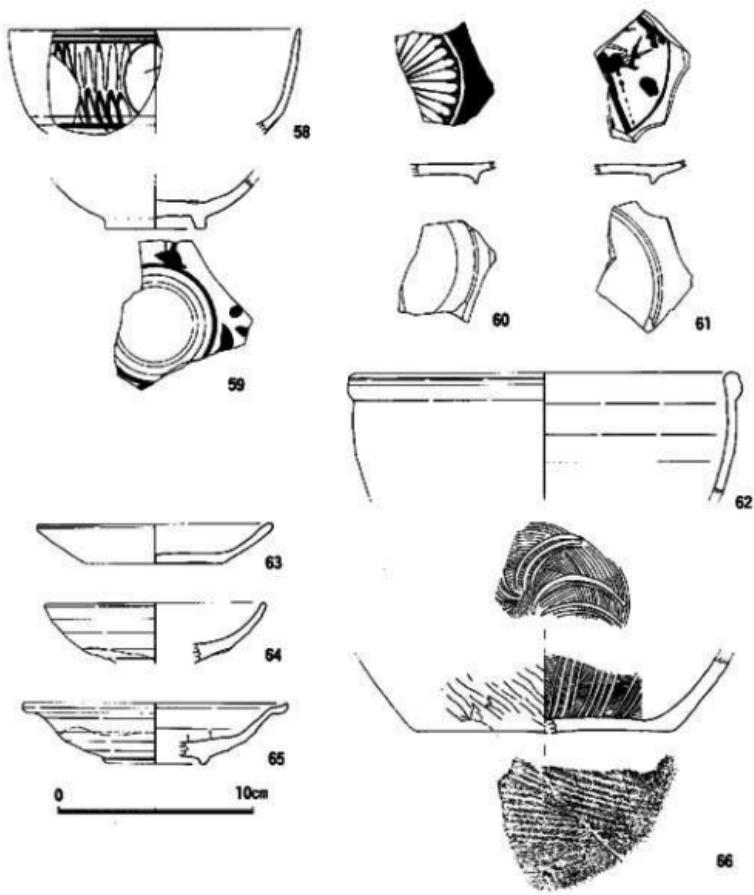
石包丁 (71) 半月形の形状を呈し、石材は輝緑凝灰岩で、立岩産である。Pit72出土。

石臼 (72~74) いずれも上口で、それぞれ復元径、器高とも異なり、別個体である。石材は凝灰岩で、72はSK01、73・74はSD04出土。

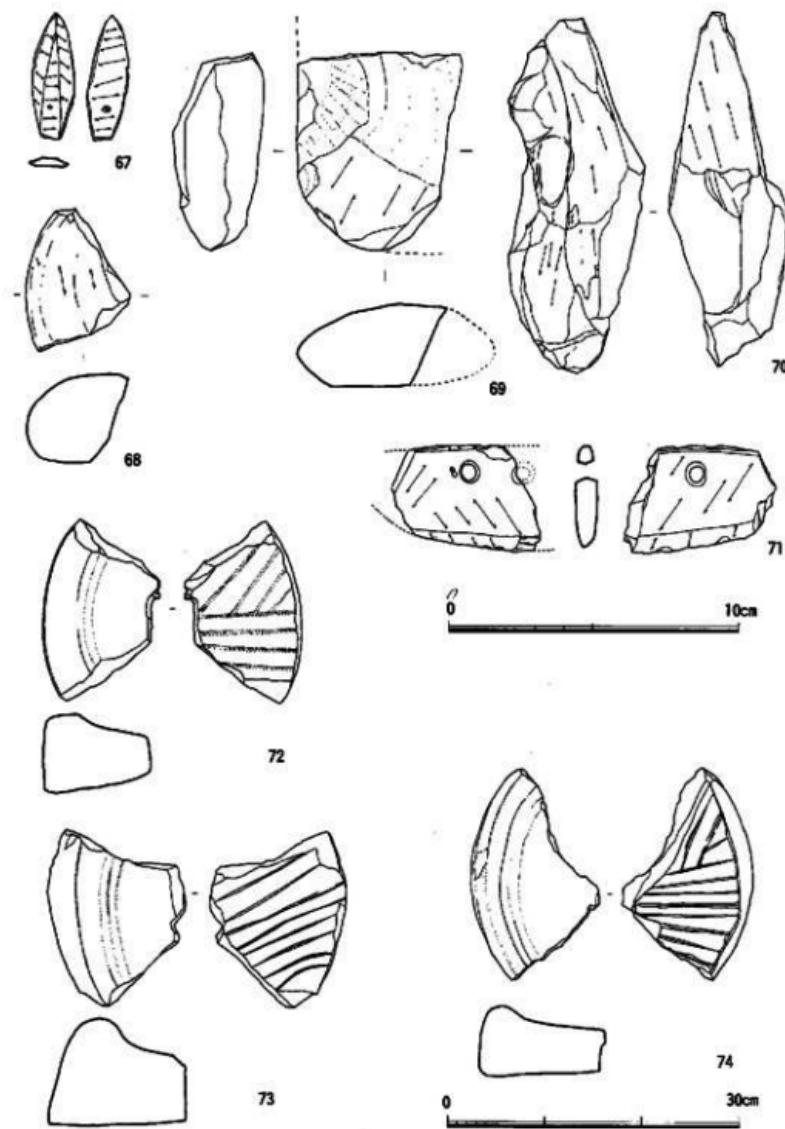
SD04



第20図 溝出土遺物実測図 (1)



第21図 漢出土遺物実測図（2）



第22図 石器・石製品実測図 (縮尺1/2, 1/6)

V 小 結

掘立柱建物の時期 当古武遺跡群第11次調査では18棟の掘立柱建物を検出したが、長大ながらも幅14mと限定された調査区域であること等の制約を受け建物としてまとめきれない柱穴も多く残った。先に述べた通り遺物包含層の残存が一部に限られ、包含層中の遺物が少なく包含層の時期を知る決め手に欠け、建物の柱穴の掘り込みがいずれの層によるものか検討することにより建物の時期を求めるることはできなかった。ここでは、柱穴掘り方出土遺物、他の遺構との切り合い関係、柱間の距離等から建物の時期を求めていく。柱穴掘り方出土の遺物はいずれも細片で甕の脇部片がほとんどであるが、口縁端部等の限られた部位の特徴から以下の通り時期を推定した。I期：6世紀前半—SB14、II期：6世紀後半—SB05、III期：7世紀後半—SB02、IV期：8世紀前半—SB07・08・09・10。II期の建物SB05の柱間の平均距離は2.4mを測るのに対し、III期のSB02が1.8m、IV期のSB07・08が1.6mから1.8m、SB09・10が2.1mと短くなる傾向を示す。II期の建物SB05が方位をN-20°-Wにとるのに対し、III期のSB02がN-10°-E、IV期のSB07がN-60°-W、SB08がN-40°-E、SB09・10がN-20°-Wにとる。SB13・15・16は柱間の平均距離1.8mを測り、方位をN-20°-Eにとる。同じ柱間の平均距離、方位をとるSB09・10と同時期のIV期に属するものであろう。1号墳、SD10が埋没し始めた時期には集落を形成するまでには至らず、IV期に入ってI区の北端、1号墳の北側に棟をそろえた建物群が集落を形成するようになったのであろう。1号墳の周溝内には柱穴等III期以降の遺構はみられず、墳丘が削平されたのはずっと後世のことであろう。

近世の溝 II区においては、17世紀前半から18世紀後半にかけての溝を多数検出した。遺構が掘り込まれた層位・切り合い関係から溝の掘削された順序は、SD03→SD04→SD02→SD01・05→SD07・08・09→SD06とする事ができる。SD03出土の砂目積みの唐津灰釉溝縁皿から、その埋没の時期を17世紀前半、SD07出土の見込み蛇の目釉ハギの白磁皿から埋没の時期を17世紀後半から18世紀前半とすると、境界線の移動等の諸事情によるのであろうが、17世紀前半から18世紀の間に6回は溝の掘削が繰り返されていることになる。

番号	攝図	図版	出土構造	遺物種類	器種	口径	器高	底径	器周の残存	色調
1	14	20	I号墳、西側周縁	須恵器	杯	(11.2)	4.7	—	1/4	淡青灰色
2	夕	夕	夕	*	*	(10.8)	3.1	—	夕	夕
3	夕	夕	I号墳、RP08	*	高杯蓋	(15.2)	5.5	—	口縁部・1/12	
4	夕	夕	I号墳、東側周縁	*	提瓶	—	—	—		青灰色
5	夕	夕	I号墳	*	器台	(30.0)	—	—	1/4	
6	15	*	I号墳、RP01	*	壺	23.6	—	—		淡青灰色
7	*	*	I号墳	土師器	*	21.4	—	—		
8	16	*	Pit201	須恵器	杯	11.0	4.0	—	完形	淡灰色
9	夕	*	II区、P49	墨色土器、A系	碗	(15.6)	5.0	—	1/2弱	青褐色
10	夕	21	SX10	土師器	杯	12.0	2.0	8.0	1/2弱	淡赤褐色
11	夕	*	SK01	伊万里染付	碗	11.5	6.0	4.8		
12	夕	*	仕事場、カマド裏面	土師器	壺	22.8	—	—	1/2弱	淡赤褐色
13	夕	20	SD01、RP03	*	杯	13.5	6.6	7.7	1/2強	明赤褐色
14	夕	*	SD01、P-1	弥生土器	壺	—	—	7.4		明赤褐色
15	17	21	SD10	須恵器	杯 蓋	(12.6)	4.6	—	1/6	淡青灰色
16	夕	*	SD10、墨色粘質土	*	*	14.1	5.0	—	1/2	淡灰色
17	夕	*	SD10、RP05	*	*	12.2	4.3	—	完形	淡青灰色
18	夕	*	SD10、RP03	*	*	12.6	3.8	—	1/2強	青灰色
19	夕	*	SD10、埋土中	*	*	12.7	4.2	—	3/4	淡灰黑色
20	夕	*	SD10、RP06	*	*	12.9	3.3	—	完形	青灰色
21	夕	*	SD10	*	*	(13.3)	3.0	—	1/4	灰黑色
22	夕	*	SD10、RP09	*	*	(13.3)	4.0	—	1/3	
23	夕	*	SD10	*	*	(14.2)	4.2	—	1/8	淡灰褐色
24	夕	*	SD10、埋土中	*	杯身	(12.8)	—	—	1/6	青灰色
25	夕	*	SD10、RP05、04	*	*	12.0	5.5	—	2/3	青灰色
26	夕	*	SD10、埋土中	*	*	(12.0)	4.7	—	1/2弱	青灰色
27	夕	*	SD10、埋土中	*	*	(11.2)	4.6	—	1/6	青灰色
28	夕	*	SD10、RP14	*	*	11.8	3.5	—	1/2強	青灰色
29	夕	*	SD10	*	*	(12.3)	3.9	—	受部1/4	暗青灰色
30	18	22	*	*	高杯蓋	—	—	—		暗青灰色
31	*	*	SD10、RP04	*	高杯	(14.0)	—	—	杯部1/3	青灰色
32	*	*	SD10、RP08	須恵器	高杯	—	—	—		灰色
33	*	*	SD10	*	甌	—	—	—		白黒茶と青色 保証茶と青色
34	*	*	SD10、埋土中	*	直口盃	—	—	—		白黒茶と青色 保証茶と青色

第3表 出土土器一覽表(1) (括弧内の数値は復元値)

番号	埠頭	図版	出土遺構	遺物種類	器種	口径	器高	底径	器周の残存	色調
35	18	夕	SD10、RP07	々	甕	(21.8)	—	—	1/4弱 底付	赤褐色
36	19	夕	SD10	土師器	杯	10.7	—	—	1/2弱	明橙色
37	夕	夕	夕	々	々	(13.6)	—	—	1/2	明赤褐色
38	夕	夕	夕	々	々	13.6	—	—	1/2	明赤褐色
39	夕	夕	夕	々	甕	(13.5)	—	—	1/5	淡黄灰色
40	夕	夕	SD10、RP13	々	々	19.3	—	—	1/4	赤褐色
41	夕	夕	SD10	々	々	20.0	—	—		
42	夕	夕	夕	々	々	11.0	—	—		
44	20	夕	SD04	土師器	小皿	(9.6)	1.4	(6.8)	1/4	明赤褐色
45	夕	23	夕	々	杯	—	—	6.8		明赤褐色
46	夕	夕	夕	々	々	—	—	7.2		淡灰褐色
47	夕	夕	夕	々	小皿	6.5	2.6	4.3	完形	明赤褐色
48	夕	夕	夕	々	杯	(12.8)	2.5	(9.0)	1/4弱	淡黄灰色
49	夕	夕	夕	々	々	(15.0)	1.9	(10.5)	1/6	淡灰褐色
50	夕	夕	夕	々	々	(15.0)	—	—	1/4	淡灰褐色
51	夕	夕	夕	々	すり鉢	(31.5)	—	—	1/8	明赤褐色
52	夕	夕	夕	々	鍋	—	—	—		明赤褐色
53	夕	夕	夕	陶器	椀	—	—	4.4		明赤褐色
54	夕	夕	夕	兼戸・模様系	大口鉢	(11.6)	—	—	1/6	茶褐色
55	夕	夕	夕	陶器	入れ物	—	—	5.0		暗緑色・透明
56	夕	夕	SD07	白磁	皿	13.2	4.4	4.1	1/2弱	灰白色
57	夕	夕	夕	陶器	すり鉢	(23.5)	—	—	1/10	赤褐色
58	21	24	SD02、II C E P06	伊万里染付	椀	(15.0)	—	—	1/8	白色・黒色
62	夕	夕	夕	陶器	鉢	(19.2)	—	—	1/8	灰黑色
63	夕	夕	SD03	土師器	杯	(12.0)	2.0	(6.8)	1/8	青紫色
64	夕	夕	SD03	唐津	皿	(11.4)	—	—	1/6	赤褐色
65	夕	夕	夕	々	すり鉢	(13.4)	3.1	(5.4)	1/6	灰色
66	夕	夕	土師器	すり鉢	—	—	(13.0)	1/4	淡赤褐色	

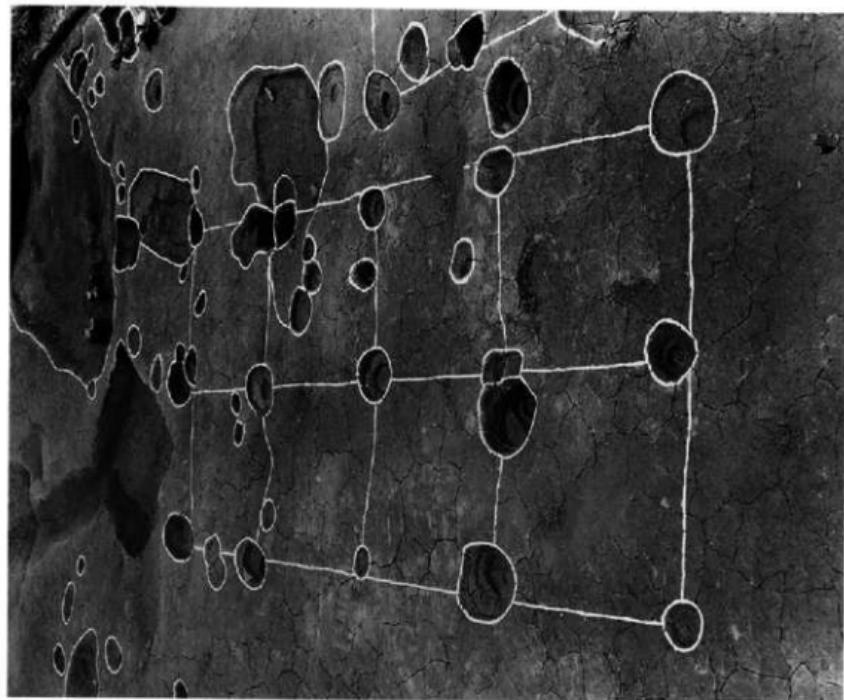
第4表 出土土器一覧表(2) (括弧内の数値は復元値)

図 版

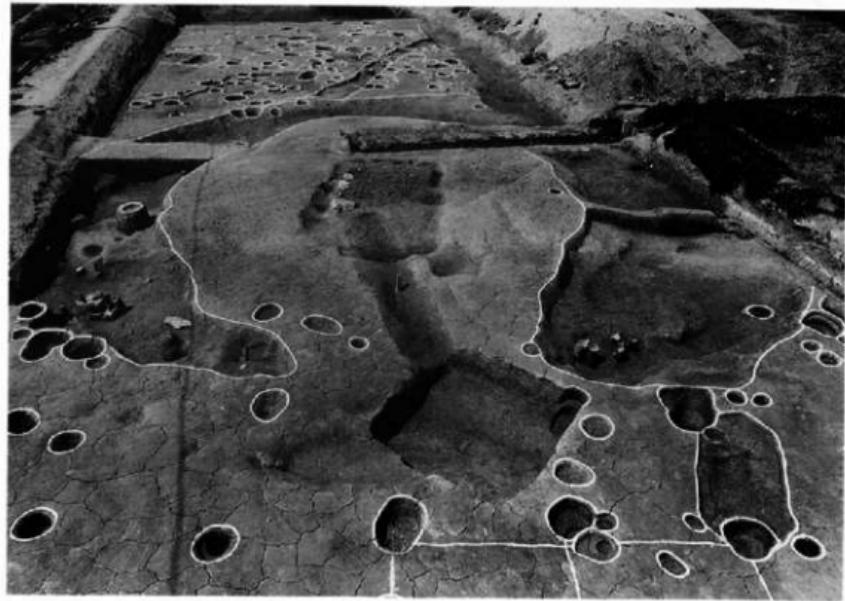


吉武遺跡群第11次調査区周辺航空写真





1. SB01塚立性遺物（南から）



2. 1号塚全景（南から）



1. 1号墳土層（南から）



2. 1号墳遺物出土状況（北から）



1. 土層（西から）



2. SD10溝（北東から）



1. SD 10満土層（北東から）



2. 1区中央部（南から）



1. I 区北半部（北から）



2. SB 20 穴住居跡（西から）

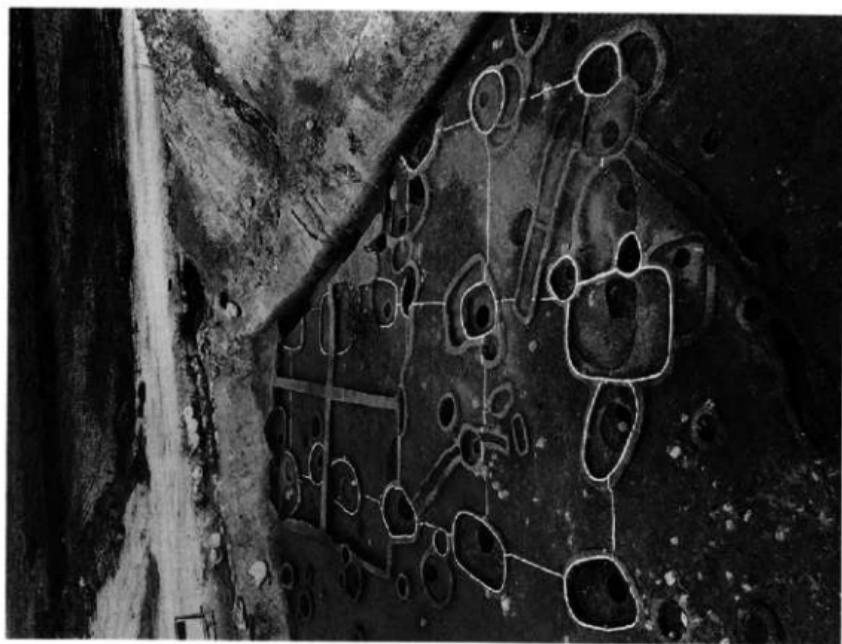


1. SB 20竈 (西から)

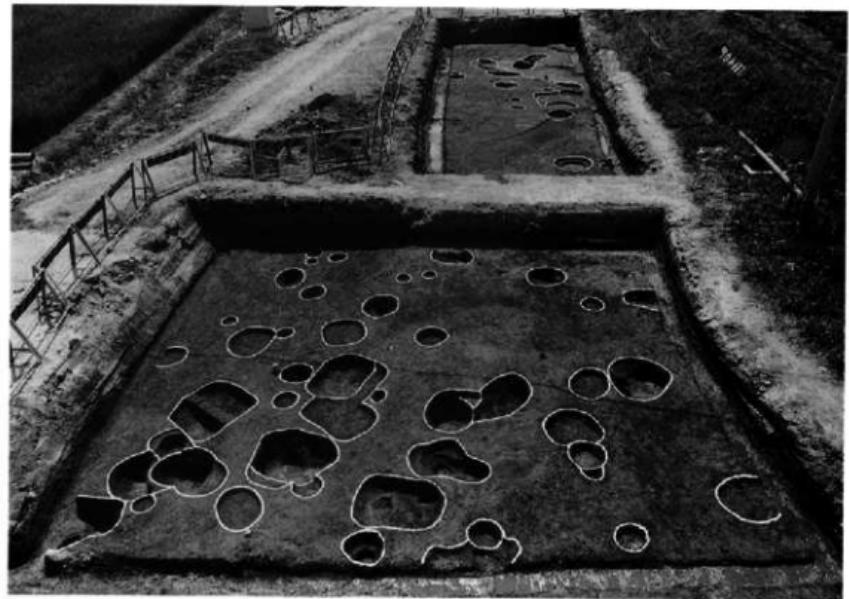


2. SB 20東側遺物出土状態 (南から)

2. I'区北端部（南から）



2. I'区南半部（北から）



2. I'区南半部（北から）



1. I区南端部（南から）



2. I区北半部（北から）



1. I区北端部（南から）



2. II区全景（南から）





1. SK01石組造構（南から）



2. SK01石組造構（南から）



1. SK01細部（東から）



2. SK01石組遺構（東から）



1. SK01細部（南から）



2. SD04遺物出土状態（南から）



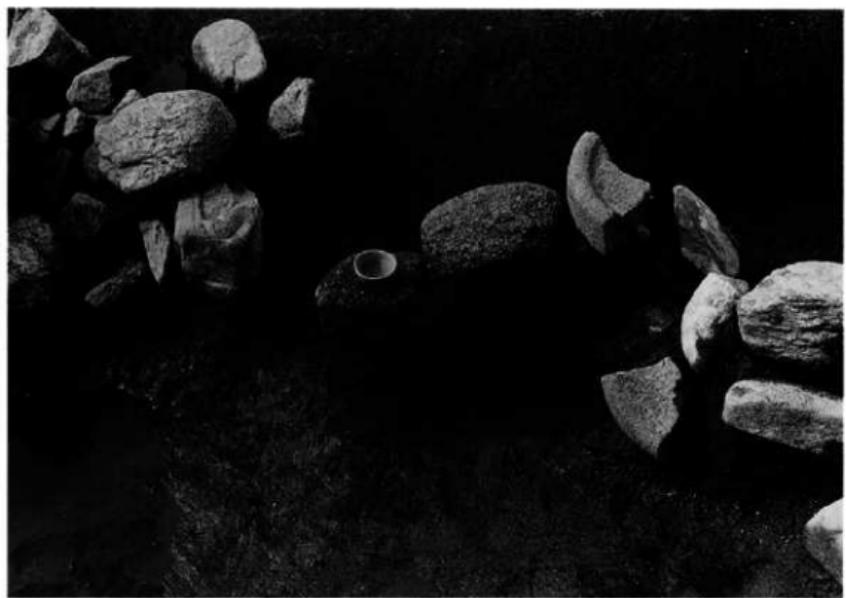
1. 同遺物出土状況（南から）



2. 同遺物出土状況（北から）



1. 同遺物出土状況（西から）



2. 同遺物出土状況（西から）



1. SD03土層（西から）



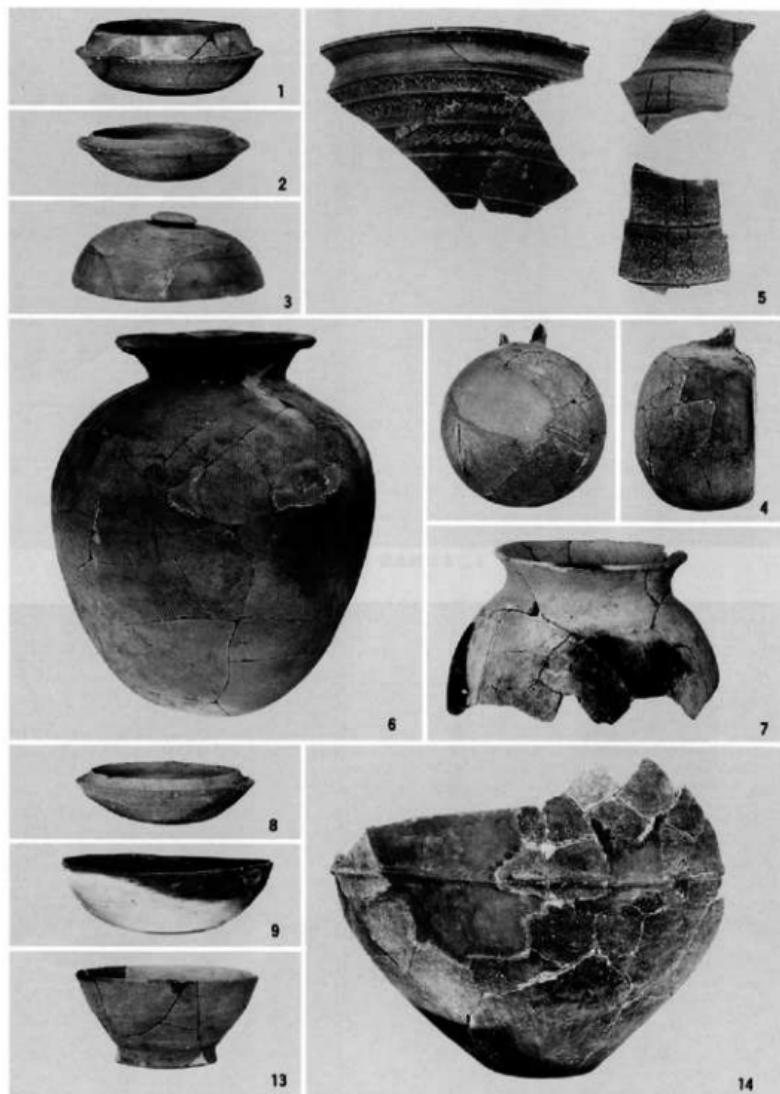
2. SD04土層（西から）



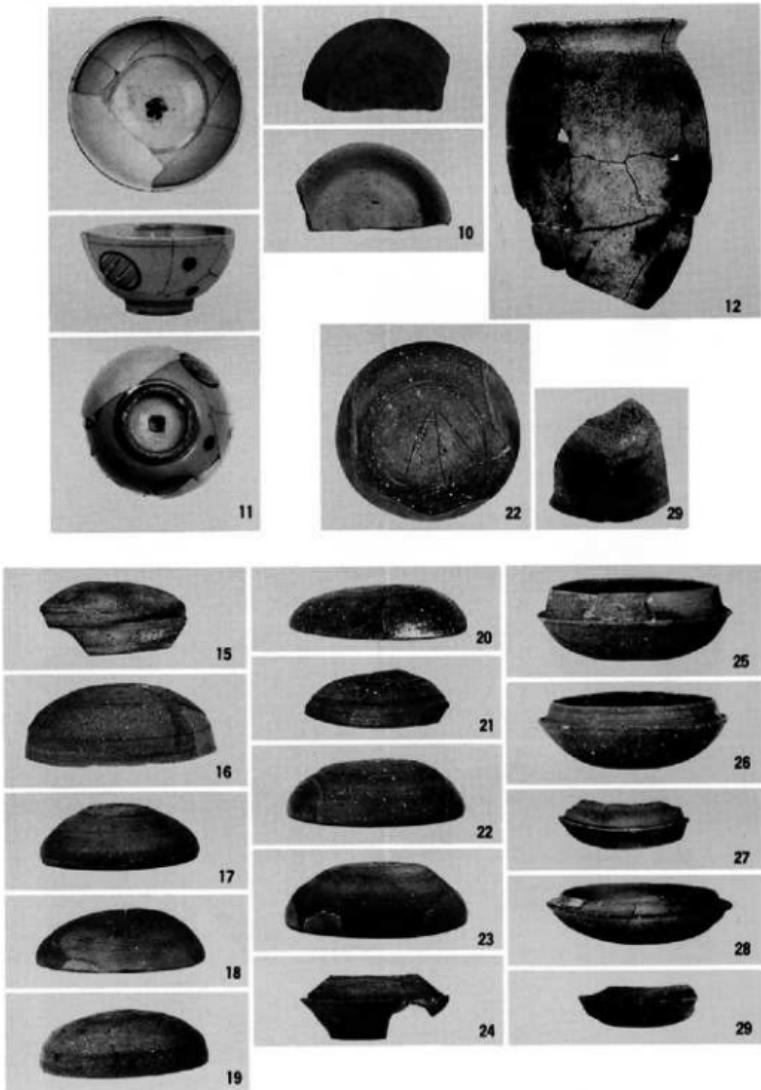
1. SD06土層（西から）



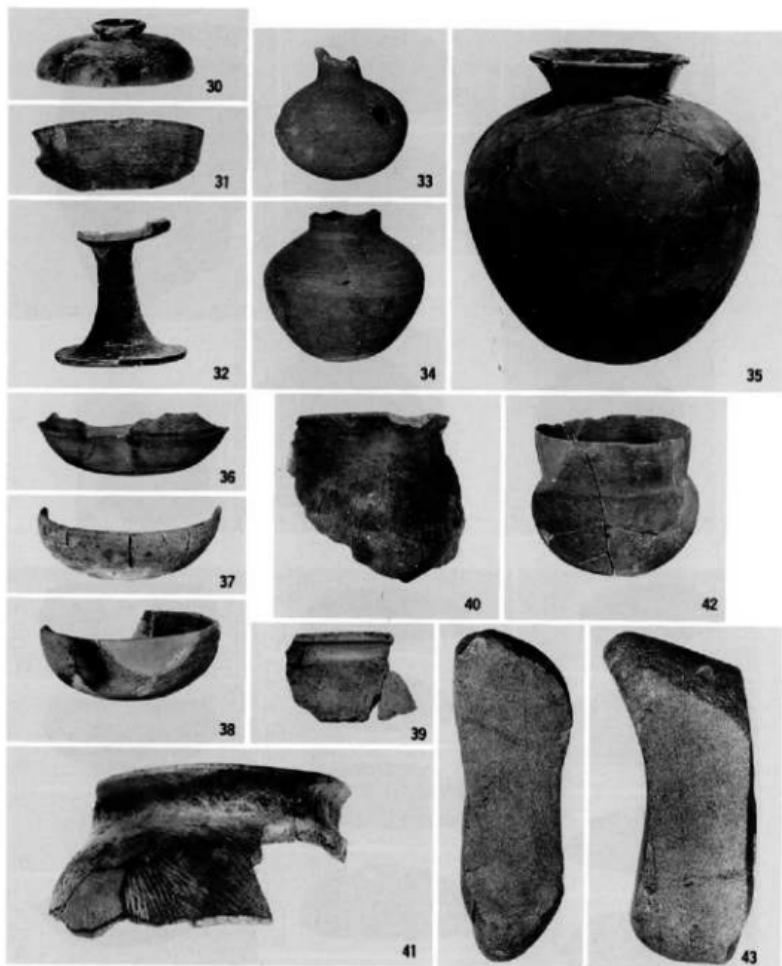
2. SD05土層（西から）



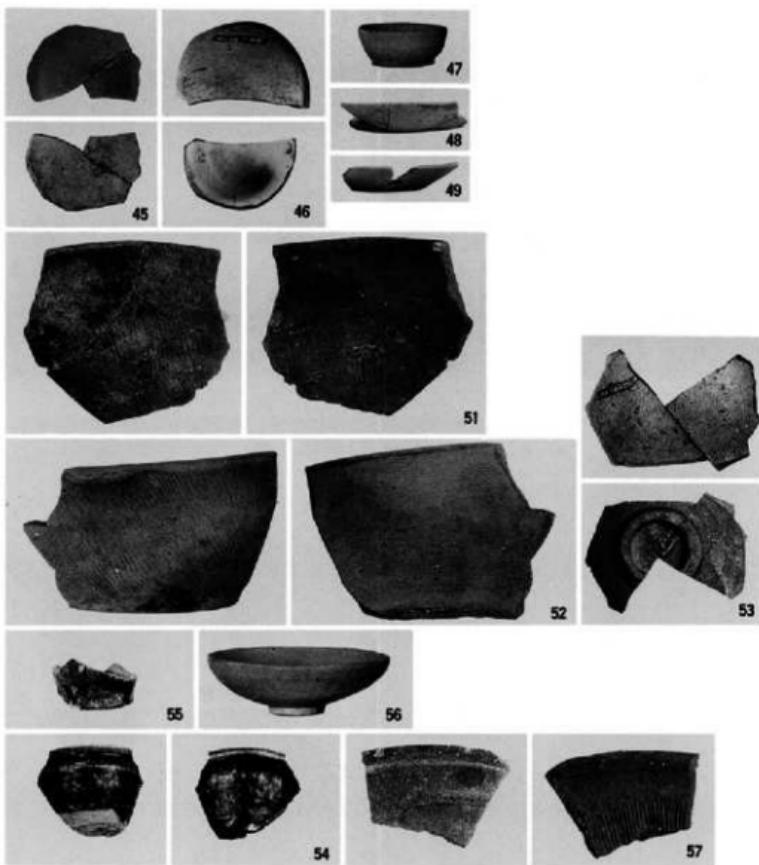
1号墳、ピット出土遺物



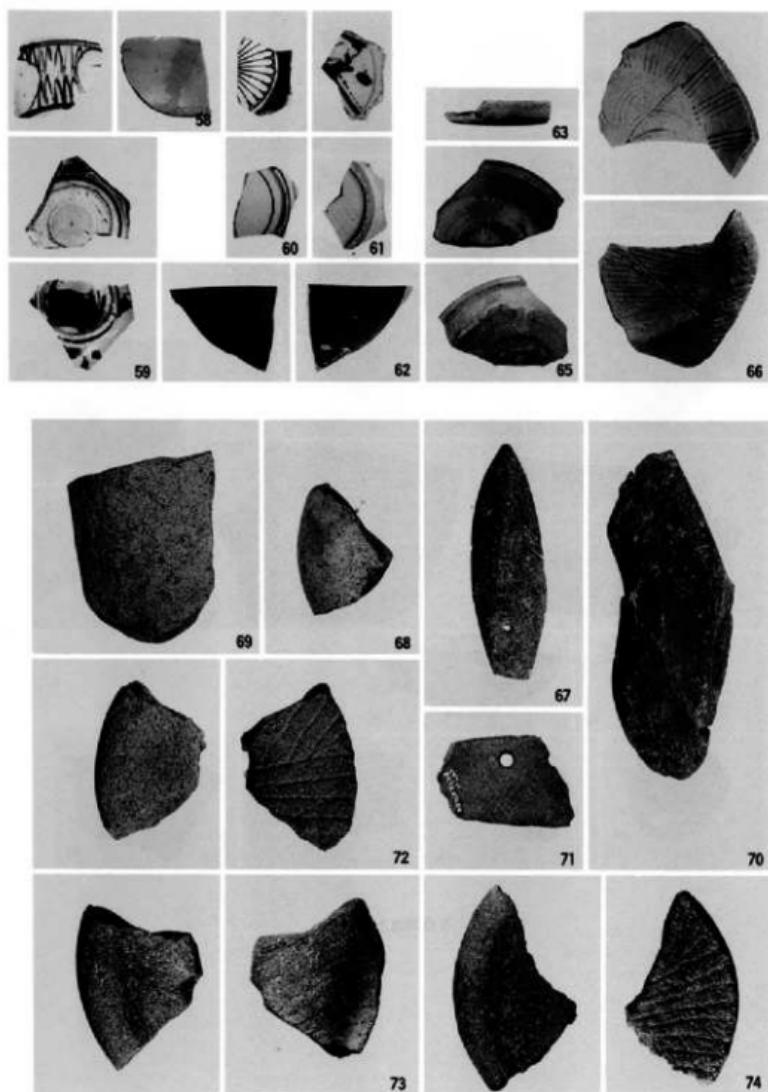
SK01、SD10出土遺物(1)



S D10出土遺物 (2)



S D04出土遺物



满出土遗物·石器·石制品

吉武遺跡群 V

—博多遺跡群第69次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 288 集

1992年3月13日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 博巧印刷株式会社

